

近世の遺構と遺物

調査区は、福井城の百間堀を挟み東西に分かれる。百間堀西側の調査区は、三ノ丸南端の屋敷地に当たる。この屋敷地は、近世を通して一つの区画であり、城代を務める人物の屋敷地となるなど位置付けの高い屋敷地であったことが窺える。しかし、遺構面は後世の削平によって残存せず、僅かに規模の大きな遺構の一部が残存するのみである。百間堀東側の調査区は、中ノ馬場と呼ばれる曲輪のうち2軒の屋敷地にかかる部分に当たる。この屋敷地は、寛文の大火 1669年以降、火除け地の御菜園とされる区画である。攪乱により部分的な破壊を受けるが、福井城築城時の17世紀初頭、寛文の大火以前の17世紀前半、17世紀後半～19世紀（大火以降）と面的に細分できる。

1. 遺構

百間堀西側調査区 百間堀西側調査区で検出した近世の遺構（図14・15・16）は、石垣・井戸・廃棄土坑などがある。これらのうち主要なものについて、以下に詳細を記述する。

石垣 百間堀西側における福井城の石垣は、石垣・石垣・石垣Xがある（図8）。石垣・はともに大きく屈曲し、突角部の基部を形成する。これらは、ほぼ同じ位置にて重複し、突角部基部の位置のみ相違する（図28）。この背後の基部は石垣X付近にあたる。以下、調査にて確認した順に詳述する。

石垣 石垣 は、百間堀が埋め立てられた時点の石垣であり、福井城の最終段階の石垣である。突角部は、南側に拡張された段階の縄張を示す。調査区付近の二ノ丸石垣の古写真によると、百間堀の水面上に15程度の石材が積み上げられていることが看取され、西三ノ丸の石垣もこれと同様な高さか、やや低い程度の高石垣であったと推測される。しかし、調査地は既に道路として大きく削平されており、石垣の高さはもとの半分程度に減じたものと見られる。絵図などにより、調査地周辺の石垣は、高石垣として構築され土堀が巡ることが確認されるが、そのような上部構造の痕跡は一切残存しない。

検出した石垣（図17）は、突角部の東面・南面と突角部南側の東面する石垣であり、それぞれ北東・南西・西北西・東南東・北北東・南南西方向に延びる。それぞれの検出長は、約25m・約6.5m・約7mで、総延長38.5mに及ぶ。石垣石材は概して5石前後が積まれた状態で残存しており、その高さは2mを前後する。良好に残存する箇所では6～8程度の石垣石材が残存し、その高さは2.5～3mである。突角部南東の出角部分は算木積みになる。残存する石垣の勾配は、突角部東面で75度前後、突角部南面の入角部分で約60度・出角付近では約70度であり、突角部南側で約65度である。

突角部東面石垣の下端は、概ね標高5.2m前後で揃うが、隅角部付近や調査区北端付近にはさらに一石分低く配される石材（図205上 石材1～12）が認められる。調査区北端付近の石材1～11はいずれも同様な淡い青緑色を呈しており、近辺の築石の色調との差異が認められる。この色調の差異は、石材1～11が逸早く埋没したことによるものと見られる。隅角部付近で一石分低く配されるのは石材12のみであるが、その北側に隣接する石材45～49は石材の下半分が低く配されている。これらの石材正面は、標高5.3m付近から上方のみ面的に削り込まれ、その上に積まれる石材と面を揃えるように調整されて

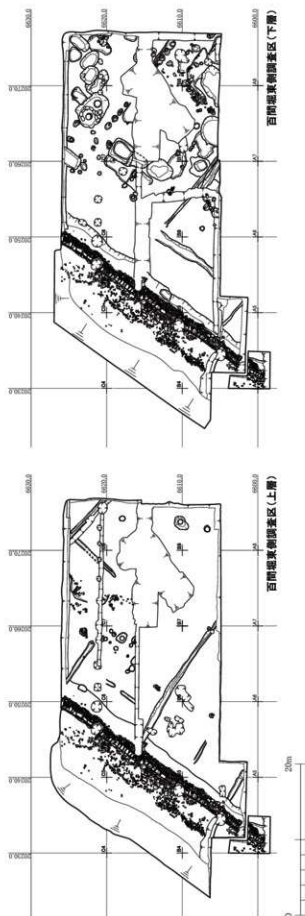
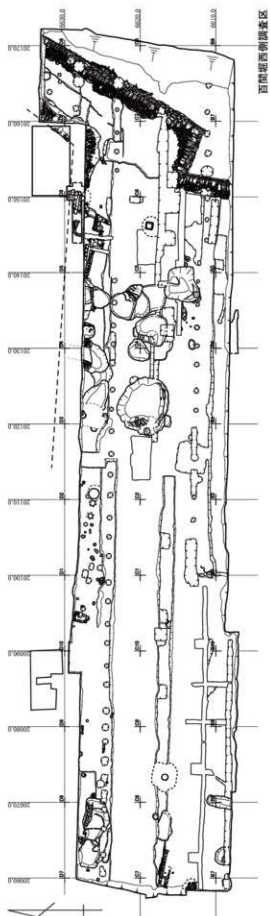
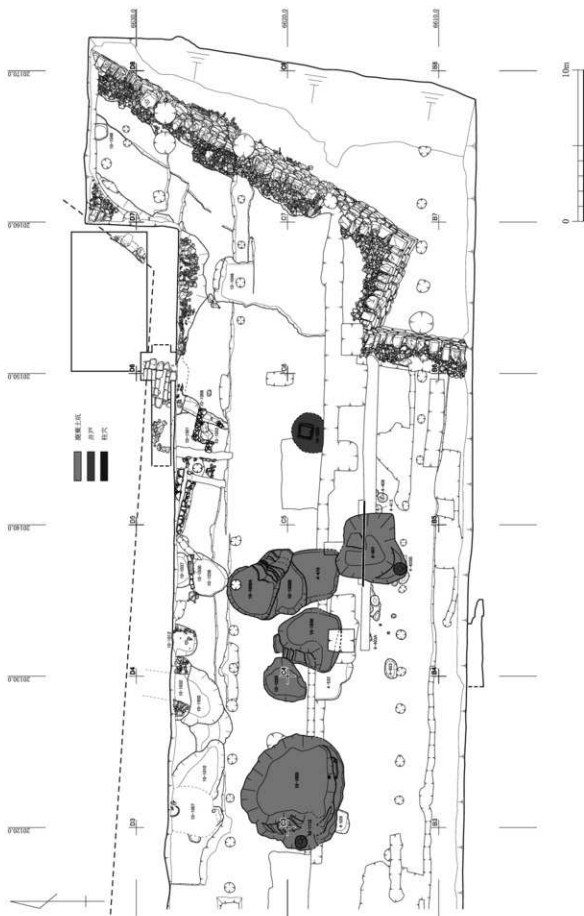


図14 近世の遺構 (S=1/500)



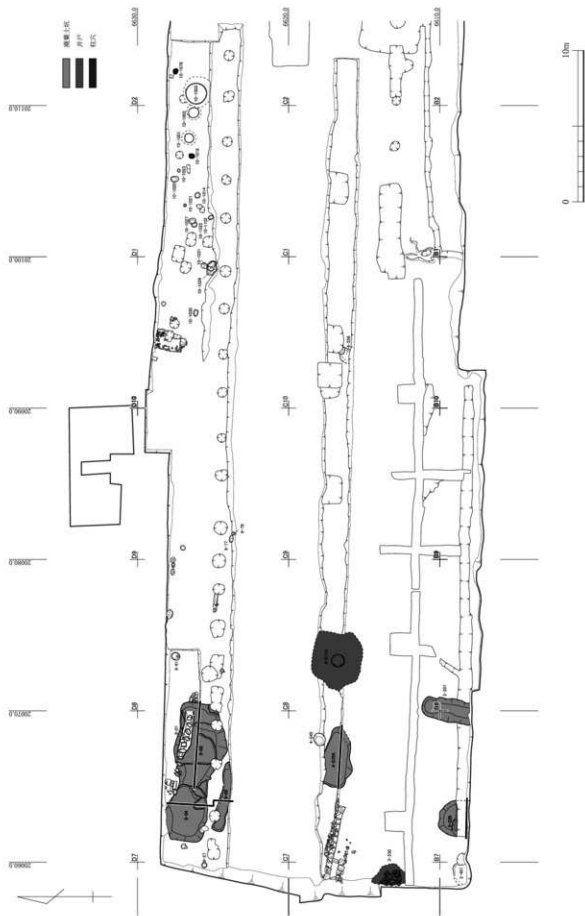


图16 百郎窑西侧部基区透样配置② (S=1/250)

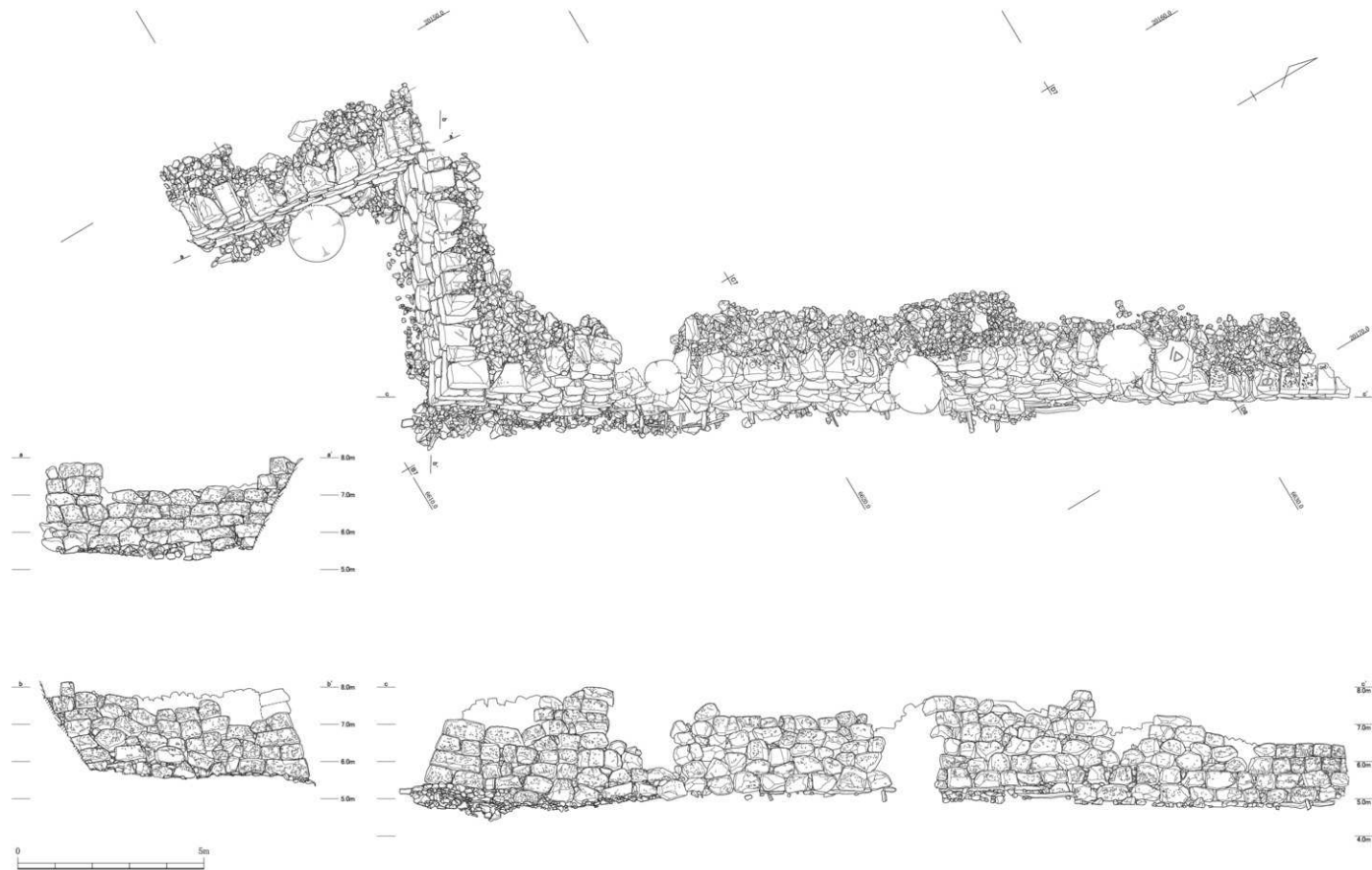


圖17 百間堀西側 石垣Ⅲ (S=1/100)

いる。このことは、標高 5.3m 付近まで埋没していたことを示すものであり、根石として埋め込まれていたことを窺わせるものである。また、石材 12 の北側上方に認められる、縦目地の通る不安定な積み方は、その位置から隅角部の積み直しを示すものと捉えることができる。そして、一石分低く配される石材 12 は、それに先立つ隅角部の根石あるいは捨石として据えられた可能性も考えられる。

突角部南面石垣の下端は標高 5.4m 前後でほぼ水平に揃う。この面には、石材 13・57・58・105・147・210(図 17・205 上)の、それぞれ右側面や上面を通る目地を境として、上半部が後退あるいは下半部が張り出すようなズレが生じている。その原因は不明であるが、この目地を境として石材の大きさや刻印の分布が変化することから、石垣を構築する際の何らかの境界に該当することが考えられる。

突角部南側石垣の下端は、直線的に斜行して入角部分に向い緩やかに高くなる。その標高は 5.5~5.9 m であり、南北での高低差がほぼ石材一石分である。この石垣の下端がほぼ標高 5.4m であるため、突角部南側の入角付近は、周辺よりも一石分浮いた状態となる。しかし、その下には石垣の並びとはやや方向性の異なる 3 石の石材(図 17・205 石材 222・223・224)があり、石垣基礎石の前面下端をこれらの上面に架けるように据えて、これらを根石として扱っている。なお、突角部東面・南面石垣とこの突角部南側の石垣は一連のように見えるが、この石垣の正面に突角部石垣を当てるように構築しており、構築順序のうえでは両者に先後関係を認めることができる。また、この石垣は、突角部石垣と接する部分から北側へは僅かに延びる程度であり、控え部分がほとんどない。

石垣に使用される石材は、いずれも福井市足羽山から産出する火山礫凝灰岩である「笏谷石」と見られる。石材の形状は、比較的直方体に近い形状のものを基本とするが、歪な多角形を呈するものも認められる。石垣の内部に隠れる石材の體(背後)部分については、台形や三角形に近い形状を呈するものもある。また、比較的整った石材であっても、すべての面が整美に加工されるものは認められず、粗割り面が残る。歪な形状の石材でも自然の転石をそのまま利用したのではなく、粗割り調整が施される。算木積みとなる隅角部付近には、比較的丁寧に整形された石材が使用される。石垣の正面となる部分については、いずれの石材も平坦に削られ、鑿などによる調整痕が残る。ただし、笏谷石の石質上、表面の剥落した石材が多い。なお、突角部石垣の北端(調査区北端)付近に、整美に整形された石材(図 205 上 石材 62~65・109~112)が建るが、この一画の整美な石材にのみ刻印が認められないことから、新たに追補された石材であると考えられる。石垣の根石に使用される石材は、やや小振りて鑿調整がきちんとしてきれいなものが確認される以外に、その形状・規模など、他の石材ととくに相違する点は認められない。

各石材の石垣正面における寸法(表 35)は、必ずしも規格的な石材が使用されているわけではないため、高さ 0.65~1 m・横幅 0.25~1.2 m と大きなばらつきがある。中でも、とくに高さ 0.3~0.4 m・横幅 0.5~0.6 m を正面寸法とする石材が多い。石材寸法は、高さ 0.3~0.4 m・横幅 0.4~0.9 m・奥行 0.6~0.8 m の範疇に含まれるものが多い。

刻印は、石垣石材 269 点中 154 点に確認した。刻印は、一石材に種類だけとは限らず、石材の同一面に異なる刻印がある例も認められる。併記される例を含め、41 種類の刻印を確認した。

石垣 胴木組 石垣の基礎構造として胴木組を検出した(図 18)。突角部石垣の胴木組と、突角部南側の胴木組は連結せず、やや異なる様相を示す。これらの胴木組は、いずれも、その隙間や上層を栗石によって充填され、敷き固められている。栗石は、拳大から人頭大のものが多いが、それ以上のものも認められる。栗石に使用されるのは笏谷石砕片であり、これ以外には僅か数点の川原石が含まれたにす

ぎない。胴木組の構造は、石垣の延長方向に直交する多数の跳木（横木）を並べ、その上に石垣と同方向に複数本の胴木（縦木）を平行に組み合わせた「梯子胴木組」である。跳木の先端下部には、部分的ながら脇胴木が残存する。

突角部南側石垣の胴木組は、延長約6m分を検出した。跳木は5本あり、それぞれ0.8～1mの間隔で配置される。胴木は5本あるが2列に分けられ、約0.3mの間隔で平行に配される。胴木は、跳木の中程より前方にて組み合わせ、両脇に杭を打ち込み固定している。脇胴木はわずかな残欠が認められるにすぎない。各部材には、継手や切欠などの組み合わせるための明瞭な加工は認められない。胴木は、径0.15～0.2m・長さ0.7～4mの丸太材が使用されている。跳木は径0.1～0.15m・長さ2m前後の丸太材が使用されている。脇胴木については、跳木と同様な規模の部材だと見られるが、検出した状態から半載されていたことが窺える。なお、この胴木組は標高5.5m前後に設置されており、その設置面は下層の石垣（石垣）の直上にあたる（図18・20・図版30）。そのため、胴木組の設置時には、石垣の石材の一部が露出していたことが窺える。先述の、石垣の根石のように利用されたやや方向性の異なる3石の石材（図205石材222・223・224）とは、その石垣の石材である。

突角部石垣の胴木組は、隅角部の北側では延長約18m分、西側では約6m分を検出した（図18）。隅角部から北側については、跳木は31本分を検出し、それぞれの間隔は0.15～1mとばらつきがあるものの比較的密に配される。跳木の配置は、石垣が直線的に延びる部分については、その方向に直交して並べられるが、隅角部およびその周辺では、少しずつ角度を変えて対角線方向を志向するように並べられる。胴木と見られる部材は15本分を検出した。これらは2～3列程度に分かれており、約0.4mの間隔をあけて概ね並行に並べられる。これらの胴木材は、すべてが跳木の上に配置されるのではなく、一部は跳木の下に位置する。この下に位置する部材については、その位置が跳木上に配される胴木の真下であることや脇胴木よりも低い部分にあたることから、胴木として設置されたものではなく、埋め込まれたものと捉えられる。そのため、この胴木組は改修を受けたものであることが窺える。胴木は、径0.1～0.2m・長さ2～4mの材が使用される。多くは丸太材であるが、角材も認められる。跳木は、径が0.1mに満たないものから0.2mに近いものまであり、長さも1m程度のものから2mを超えるものがあり、一定の規格ではない。隅角部の跳木は、とくに長い部材が使用されており、その長さは2.5～4mである。残存する脇胴木材は、径0.07m前後・長さ約2mの細長い丸太材である。各部材には、継手や切欠など組み合わせるための加工は認められない。跳木には、樹皮の残るものや先端が枝分かれしたままのものもある。これらの中には、建築部材の転用と見られる臍穴を持つ部材が少量認められるものの、特別に胴木として加工されたものは存在しないようである。なお、この胴木組は、概ね標高5.2～5.3m付近に設置されており、残存する石垣の直上を設置面とする。しかし、石垣の石材よりも前にせり出す位置に組まれていることから、その構築の際に残存する石垣の前面は既に埋没した状態であったことが窺える。隅角部から西側については、径0.3m・長さ3.35mの一本の丸太を胴木として使用しており、脇に杭を打ち込んで固定している。跳木は連続して並べられず、胴木材の安定のために差し込まれたのみのものである（図18）。

隅角部付近では、上記の胴木組の上方にて別の胴木組を確認した（図18）。それは、上記の胴木組の上層にある、厚さ約0.4mの笏谷石砕片（栗石）堆積の上面（標高5.4m付近）に敷設されるもので、石垣隅角部のための部分的な胴木組である。この部分的な最上層の胴木組は、先に触れた、隅角部の積み直しの際に設置されたものと捉えられる。胴木は、径0.15m前後・長さ0.8mと1.7mのものが2本あ

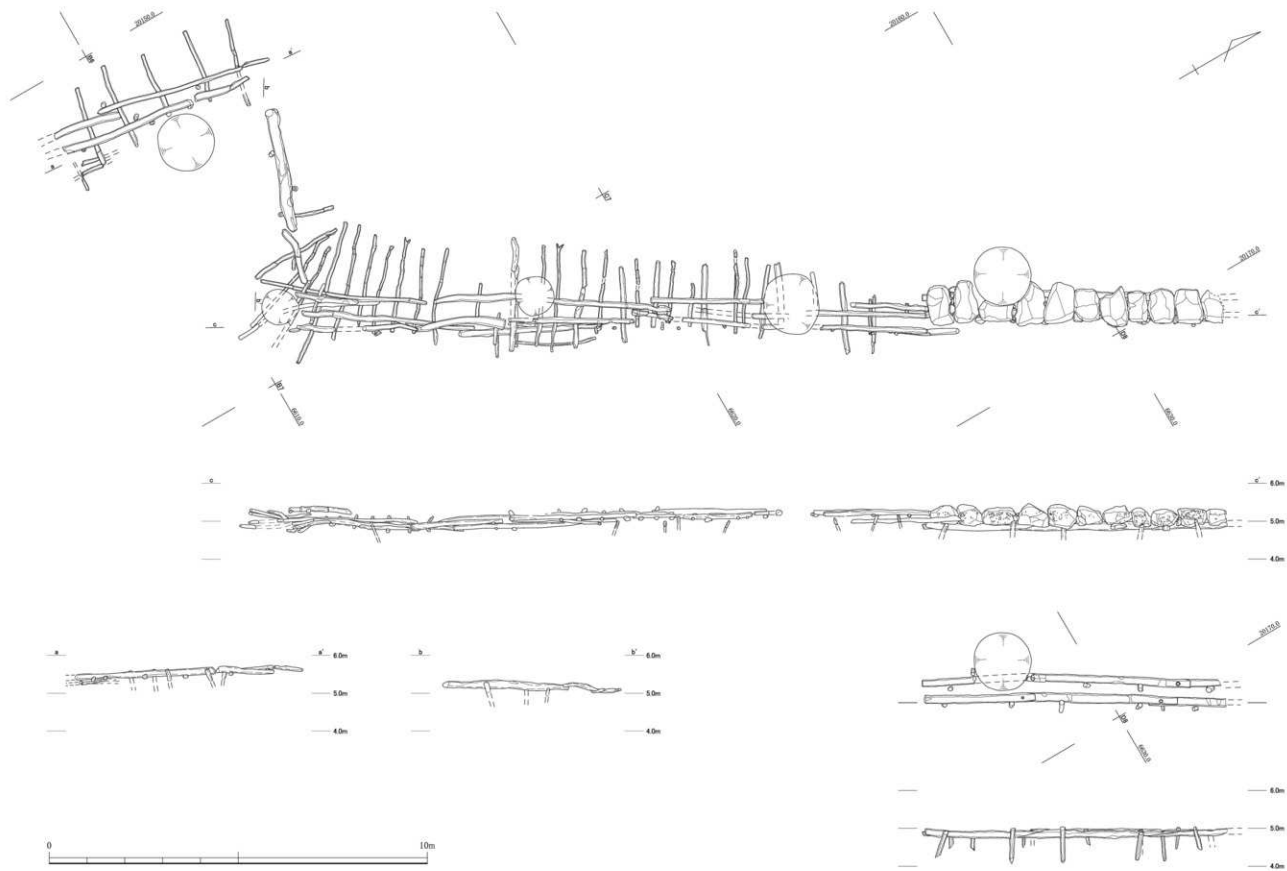
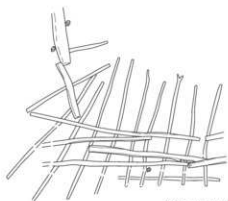
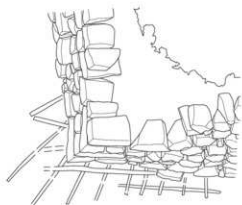
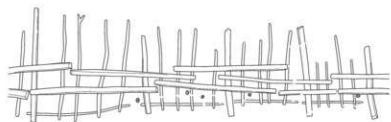


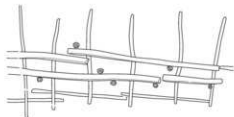
圖18 百間城西側 石垣Ⅲ 桐木組 (S=1/100)



突角部用重編桐木組



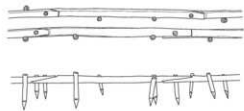
突角部裏面桐木組①



突角部用重編桐木組



椅子桐木組構造



突角部裏面桐木組②



椅子桐木組継手部分

图19 桐木組復元の模式図

る。跳木は、径 0.1m前後・長さ 0.7-1.1mのものが 2本残存する。

突角部の北側においては、胴木組の下層から別の胴木組を確認した(図 18)。下層の胴木組は、逸早く埋没したことによる石材 1-11(図 205上)の直下に組まれたものである。この胴木組の構造は、石垣と同方向に胴木を 2列平行に配置し、杭で固定するのみの「枕胴木組」である。胴木組は延長 8m分を検出してあり、それぞれ 3本分の胴木材からなる。胴木は、表面が丁寧な鉋調整された一辺 0.2-0.25m・長さ 3-4.5mの角材である。この材の端部は、斜めに切り落とすようにして継手を作り出してあり、その中央に円孔が穿たれる。胴木は、継手を接続して、円孔に杭を通すように打ち込み、さらに胴木の両脇に複数本の杭を打ち込むことで固定している(図 18・19)。胴木の南端部分については、継手が作り出されず、端部は真直ぐに切り落とされる。上層の胴木組がありあわせの部材によって組まれたようであるのに対して、胴木組を構築するために特別に調整した部材を揃えたようである。この胴木組は、標高 5m付近に設置されており、残存する石垣の石材直上に固定されている(図版 31下)。

なお、石材 1-11(図 205上)は、上層の胴木組の北側に接続するように並んでおり、石材の上面と胴木組の高さが一致すること(図 18)などから、これらの石材をそのまま土台として利用したことが考えられる。上層の胴木組は、残存する石垣の石材が埋没した後、その直上に組まれたものであるため、その時点にはこれらの石材も上面ないし上半部を残し、既に埋没した状況にあったと見られる。また、上層胴木組の下層に確認される、改修により跳木の下に埋め込まれた胴木材は、石材 1-11を避けるように位置すること(図 18)から、これらの石材よりも後出することが考えられる。これらのことから、石材 1-11とその梯子胴木組は、石垣よりも新しく、石垣よりも古い段階のものであると言える。石垣 石垣は、石垣直下にほぼ重なるように残存した石垣である(図 8・20)。突角部は、南側に拡張される以前の縄張を示す。また、石垣は、その下層の石垣との関係から福井城の築城時の姿を留める石垣であることが考えられる。

検出した石垣(図 20)は、突角部の東面・南面と突角部南側の東面する石垣であり、それぞれ北東-南西・西北西-東南東・北-南方向に延びる。それぞれの検出長は、約 18.5m・約 7m・約 12mであり、総延長 37.5mに及ぶ。石垣石材は、場所によって残存状況が異なるが、概して 3石前後が積まれた状態で残存しており、その高さは 1m前後である。最も良好に残存する箇所は、6石程度の石垣石材が積まれた状態であり、その高さは約 2mである。突角部南東の出角部分は、調査前に地下駐車場の工事により破壊されたが、幸うじて算木積みであることが確認できる。残存する石垣の勾配は、突角部東面で約 80度、突角部南面で約 70度、突角部南側で約 75度である。

なお、突角部南側の石垣は、突角部の石垣と接する部分で途切れるが、その北側に栗石・石垣石材の残欠が直線的に連なるように確認されることから、本来は約 4.5m分突角部上に突き出して構築されたものと見られる。ただし、この部分は突角部造成土中に埋め込まれる部分である。石垣石材の残欠は、構築時の地形根切り内に納まった状態であり、二次的に移動した痕跡は認められない(図 9・20)。そのため、福井城築城時より残存したものと見られる。地形根切りは、部分的に削平を受けるが長方形を呈すようであり、南北約 5m・東西約 3m・検出面からの深さ約 1mである。

突角部東面石垣の下端は、概ね標高 4.2m前後で揃うが、部分的な沈み込みにより波打つような状況である。石材の寸法や様相の似通ったもの下端が揃うような筋があり、あるいは作業工程の違いなどの反映であることも考えられる。突角部南面石垣の下端は、緩やかに直線的に斜行しており、入角部分では標高約 5m、出角部分では標高 4.2mである。この面の中程に斜めに通る目地が認められ、その状



圖20 百間堀西側 石垣Ⅱ (S=1/100)

況から出角部分を先に構築したことが捉えられる。残りの部分は、石材を石垣と石垣の間を埋めるように充填する。突角部南側石垣の下端は、入角部分より約5mまでは標高約5mであり、それより南側へは緩やかに斜行して低くなり、調査区南端部分では標高約4.3mである。

石垣に使用される石材は、裏込栗石を含めていずれも笏谷石であり、他の石材は認められない。石垣石材の形状は、必ずしも直方体を志向するとは言えず、加工されていても自然面の様相が窺える部分が残る。石垣の正面については、いずれの石材も平坦に削られており、鑿などによる調整痕が残る。ただし、笏谷石の石質上、表面の剥落した石材が多い。石垣の根石として最下段に使用される石材は、やや小振りで鑿調整の行き届かないものが認められる以外は、その形状・規模など他の石材ととくに相違するところは認められず、積み方にも変化が認められない。なお、脚木組は、その痕跡も残らず、あるいは備えられなかったことも考えられる。

各石材の石垣正面における寸法(表36)は、高さ0.15~0.6m・横幅0.25~1.25mと大きなばらつきがあるが、そのうち高さ0.25~0.35m・横幅0.4~0.5mを正面寸法とする石材が多い。石材寸法は、高さ0.3~0.4m・横幅0.5~0.6m・奥行0.65~0.7mの範疇に含まれるものが多い。

刻印は、石垣石材157点中48点に、12種類を確認した。石垣の根石として利用された石垣の石材222・223・224には、石垣にしか認められない刻印が施されており、石垣構築時に露出すると見られる部分に刻印が認められることから、その刻印は石垣構築時に現地で刻んだものである可能性がある。また、墨書(墨痕)のある石材を3点(図20・205下 石材6・14・64)確認した(図21)。



石垣 石材6 墨書



市垣 石材64 墨書

図21 石垣 石材の墨書

石垣X 石垣Xは、石垣・と対になり突角部を形成する(図8・22・23)。検出した石垣は、北西に面した突角部の背後となる石垣であり、北東-南西方向に延びる。検出長は約5m分である。2-5石前後の石材が積まれた状態で残存しており、最も良好に残存する箇所での高さは約2mであり、勾配は約80度である。石垣の下端は、標高約4-5mで南側へ向って高くなる。石垣石材は、いずれも笏谷石であり、その形状・規模には大きなばらつきがある。胴木組については、胴木と見られる部材を確認した(図23・図版29)が、石垣の検出位置の関係などから胴木組の面的な検出が不可能であり、胴木組形式は特定し得ない。しかし、跳木が確認されないことから、枕胴木組の可能性があろう。

刻印は、残存する石垣中には1例を確認したのみであるが、崩落した石材には3例認められる。このうち2例は石垣にのみ、1例は百間堀東側石垣にのみ共通の刻印が認められ、他の1例は類例が認められない。石垣中にて確認した刻印は、「回」状の刻印であり、石材の上面に刻まれる(図22)。

石垣本体は僅かな部分を検出したに過ぎないが、確認される地形根切りや栗石などから、石垣は60度前後屈曲する入角となることが窺える。この入角は、突角部の基部となる箇所である。石垣Xの背後に確認される地形根切りの掘り方は、北東-南西方向に約9m延び、その南端で西北西-東南東に方向を変えて10m程度延びる。栗石の状況から、北側・西側ともにさらに石垣が延びるものと見られる。

この西側で、本調査以前に行われた試掘調査や事業対象地周囲に鉄骨を打ち込む際の立会い調査などにより、狭長な範囲ではあるが面的な調査が為されている。その結果、栗石中に構築された階段を検出した(図15・22)。階段は7段分5段目欠落を確認し、その規模は幅約1.8m・検出高約1.5m・一つの段差0.2m前後である。この階段の両側には、内側を面とする石垣状の壁がある。階段部分の石材は、0.3-0.5-0.2m程度の扁平なものであり、壁面部分の石材は、0.5-0.6-0.4m程の石垣石材と違わない寸法である。これらの石材はいずれも笏谷石である。

階段の位置は、平面的には石垣Xの地形根切り内に納まるものであり、立面的には残存する石垣X上部と僅かに重複する。その状況から、この階段は石垣Xに備えられたものと判断される。ただし、石垣Xは位置の不確定な部分があり、本来の高さが不明であるため、階段がどのような状態で付設されたのか不明である。石垣がある程度の高さを持っていたのであれば、埋門のような状態であったことも想像される。この階段を示す絵図は認められないが、この対岸の二ノ丸に埋門を描いた絵図(図27上)がある。石垣中に扉が描かれ、その下に階段状の表現がある。また、別の図(図27下)には、二ノ丸の埋門から対岸の石垣(石垣X)へ繋がる橋状の表現が認められる。絵図では直接石垣に橋が繋がる表現であるが、二ノ丸と同様な埋門が階段のようなものが存在し、そこに橋が繋がっていたことが考えられる。絵図に現れる二ノ丸の埋門は太鼓門枱形の近くであるため、それに対峙する部分がこの階段であるとは考えられない。しかし、検出した階段が、そのようなものの一つであった可能性は考えられる。

突角部 突角部は、石垣・と石垣Xで構成される。これらの石垣の方向性などから、突角部は北東-南西方向を長軸とする長方形を呈するものと捉えられる。突角部の北端は、調査区外となるが、石垣の石材の状況から調査区からそれほど離れない位置にあると見られる。突角部とその西側へ延びる石垣との位置関係を絵図で確認すると、西側へ延びる石垣は突角部長軸方向の中央付近に接続している(図27)。このことを石垣の突角部にあてはめると、突角部の長さは30m程度に復元され、調査区端から約5mの部分に突角部北端の位置が推定される。突角部南端の位置は、石垣段階と石垣段階では6-7m程度移動しているが、それと同様に突角部北端の位置も移動したか否かは不明である。ただし、距離的な信用度が高くはないが慶長18(1613)年頃の絵図によると、突角部から西側へ延びる石垣は突

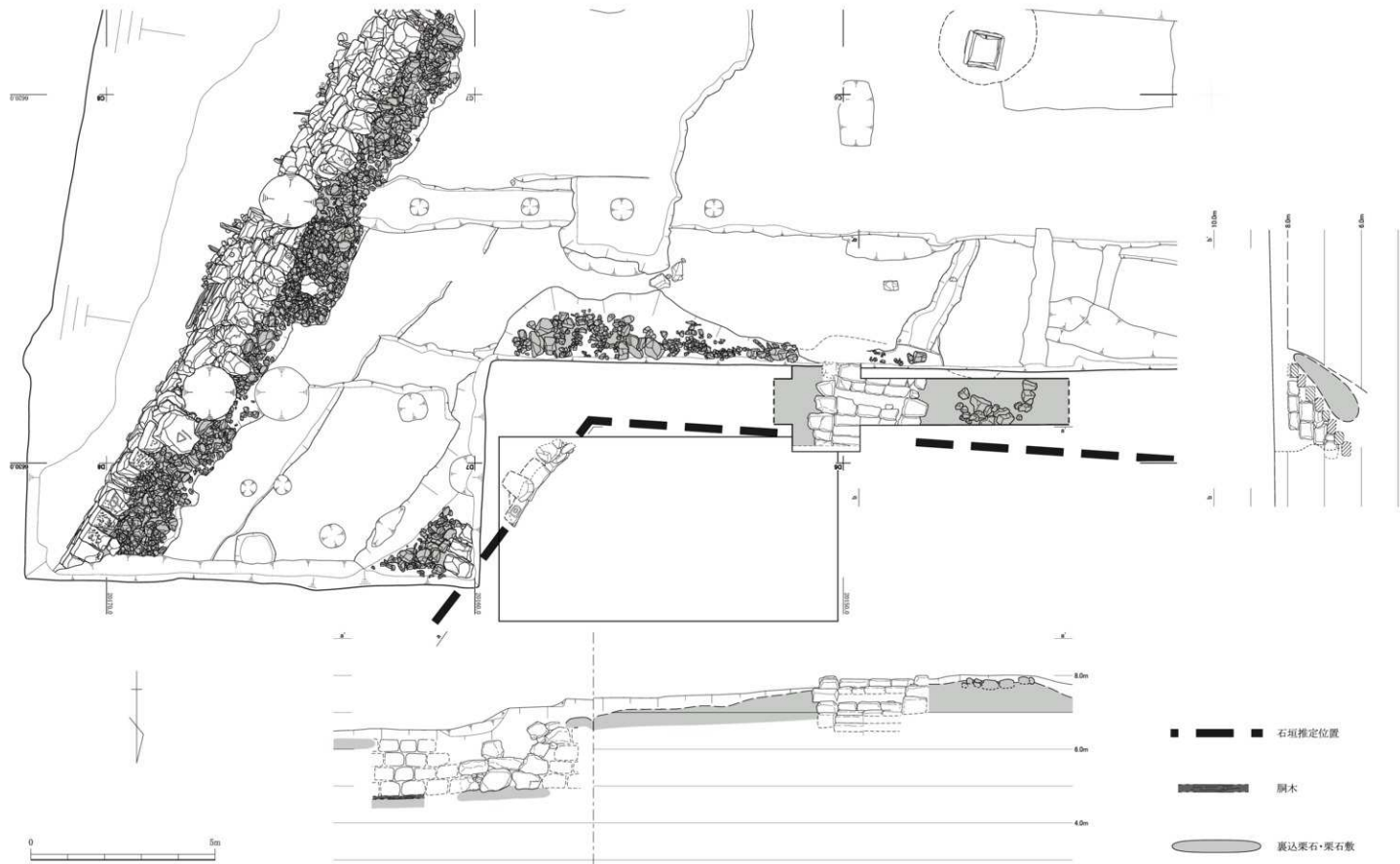
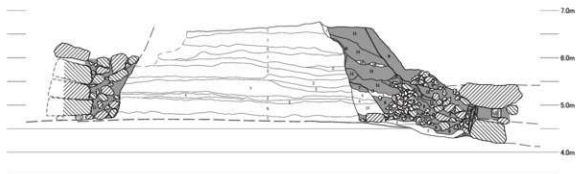


图22 石垣X(02-10-06-7)と階段(試掘・立会)(S=1/100)



No.	土名	土質	原状軸	軸上	植物	崩石径 (cm)	木の根の径 (cm)	備考
1	黄褐色	1P95/0	粘質土	少	少			崩石多量
2	灰黄色	2.5S/2	砂質土	少	少			崩石
3	河川	BY/1	砂質土	少	少			
4	緑褐色	SC7/1	砂質土					
5	緑才一ツ灰色	SC7A/1	粘質土		少			
6	黄褐色	1P95/1	粘質土	少	少			
7	灰色	2.5S/2	粘質土	少	少			
8	灰色	1P95/1	粘質土	少	少	多(φ0.5)		
9	灰黄褐色	1P95/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~0.8)		崩石多量
10	灰才一ツ系	2.5S/2	粘質土	少	少			
11	暗黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~0.8)	少(φ0.5~1.0)	崩石多量
12	黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	多(φ0.5~20.0)	少(φ0.5)	
13	緑才一ツ系	SC7/1	砂質土	少	少	少(φ0.5~10.0)		

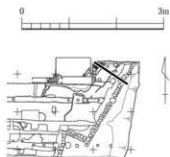
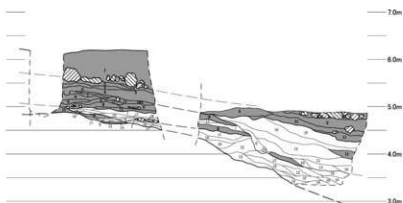


図23 百間堀西側石垣 突角部横断面 (S=1/80)



No.	土名	土質	原状軸	軸上	植物	崩石径 (cm)	木の根の径 (cm)	備考
1	黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	多(φ0.5~0.8)	少(φ0.5~1.0)	崩石多量
2	暗褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~2.0)		
3	黄褐色	1P95/1	砂質土	少	少	少(φ0.5~10.0)		
4	灰黄褐色	1P95/2	粘質土	少	少	多(φ0.5~10.0)		
5	黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	多(φ0.5~2.0)		
6	黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少			
7	緑才一ツ系	BY/3	砂質土	少	少			
8	黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~2.0)		
9	暗黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~5.0)		
10	暗黄褐色	2.5S/2	粘質土	少	少	少(φ0.5)		
11	灰色	2.5S/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~20.0)		
12	灰色	2.5S/2	粘質土	少	少			
13	暗褐色	1P95/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~2.0)		
14	暗褐色	1P95/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ1.0)	
15	灰色	BY/1	砂質土	少	少	少(φ0.5~10.0)		
16	灰色	1P95/1	砂質土	少	少			
17	才一ツ系	BY/4	砂	少	少			

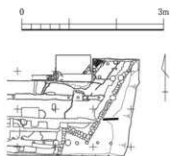


図24 百間堀西側石垣前面(吉野川) 堆積状況 (S=1/80)

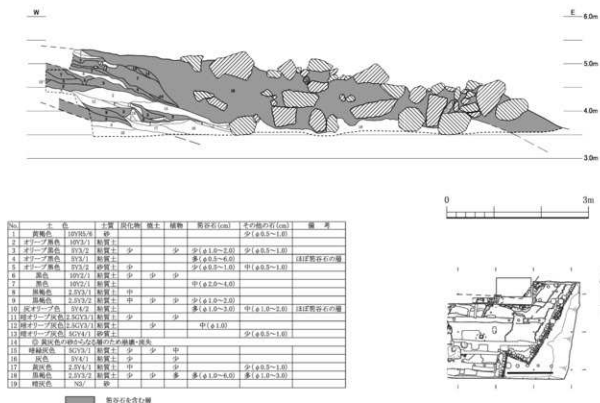


図25 百間堀西側石垣前面 堆積状況① (S=1/80)

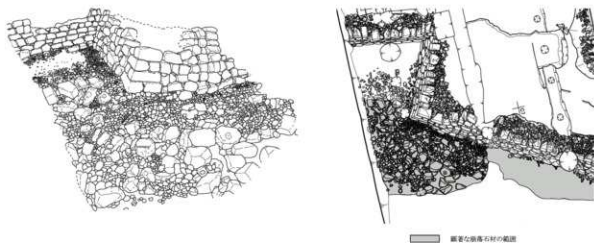


図26 百間堀西側石垣前面 堆積状況② (現説資料などより)



「福居御城下絵図(貞享2年)」松平文庫 松平宗紀氏藏 福井県立図書館保管



「御城下之図(慶応年間、明治14年復元作成)」松平文庫 松平宗紀氏藏 福井県立図書館保管



突角部



二ノ丸埋門

図27 絵図に見る調査地周辺と突角部・二ノ丸埋門

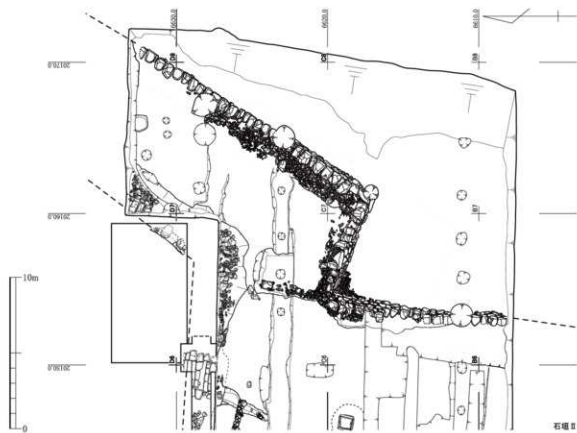
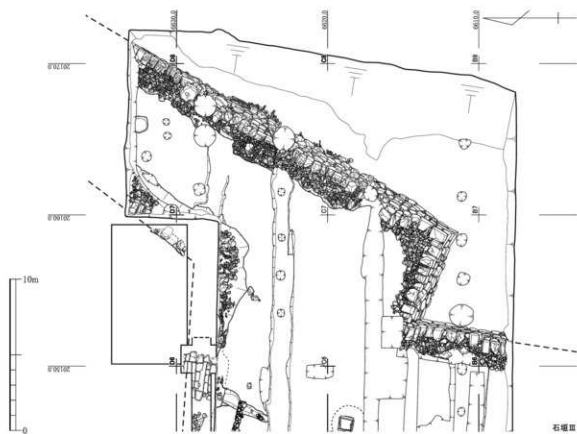


圖28 百間堀西側 石塚Ⅲ・石塚Ⅱ (S=1/250)

角部長軸の南端から3分の1付近に接続することが確認され、これから算出すると突角部北端の位置は変化していないようである。また、突角部の幅は約10mで、ほぼ変化しない。そのため、石垣から石垣への変化に伴う突角部の変化とは、突角部南面石垣がそのまま南側へ平行移動し、若干の拡張をしたに過ぎないものと言える。(図28)。

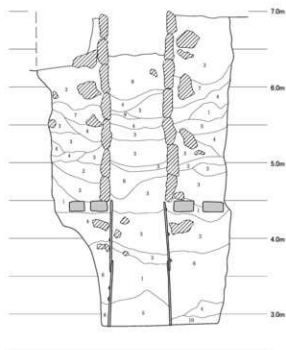
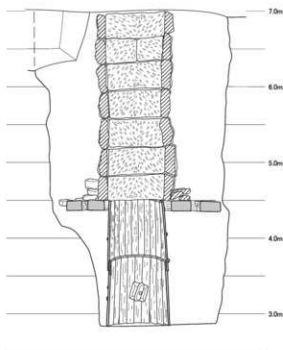
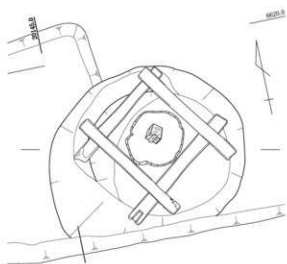
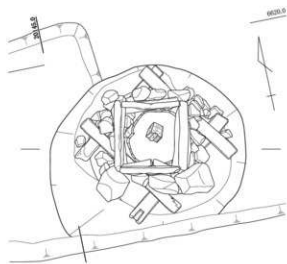
突角部の高さは、既に大きく削平されているため不明である。しかし、絵図(図27)に見える突角部の石垣は、西三ノ丸の石垣と一連となる表現がなされており、銃眼の開いた白壁の塀が連なる表現も認められることから、西三ノ丸の高石垣と同様な高さであったことが窺える。これに対して、突角部から西側へ延びる石垣は細く表現されており、高石垣でないことが示される。先にも触れたが、調査地付近の二ノ丸石垣の古写真によると、百間堀の水面上に15石程度の石材が積み上げられていることが看取され、西三ノ丸の石垣もこれと同様な高さか、やや低い程度の高石垣であったと見られる。石垣の遺存状況の良好な部分は7・8段の石材が積まれた状態であり、その高さは約3mである。このことから、突角部石垣の本来の高さは約6mであり、石垣天端の高さは標高約1mであると推測される。高さ約6mのうちの盛土の割合を算出するには、地山の高さなどを確認する必要がある。百間堀西側沿いの古代以前の自然堆積土は、調査区北側では標高約7.3m以下に、南側では標高約6.8m以下に堆積しており、北側の旧地表がやや高い(図9・12・23)。中世段階に盛土により平らに整備され、標高7.5m前後の高さに砂利敷道路が敷設された(図12・107)。その後、幾度か嵩上げされた後に、高石垣が構築され突角部として整備される。高石垣・突角部構築のための盛土は3mを超えるものと見られ、上半部が盛土によるものである。

突角部の下端幅10m、突角部の高さ6m、両側の石垣石垣X・の勾配70～80度ということから、突角部の上端幅は7～8mと算出される。絵図に見えるような、白壁の塀が巡るスペースは十分にある。突角部は百間堀側からの障壁の役目を負うものであり、突角部上の塀は東側の百間堀に面する部分を中心に設置されたものと見られる。なお、西三ノ丸の高石垣には下端幅などを示す痕跡は残存しないが、石垣周辺に認められる遺構の空白地が高石垣のための盛土が為された部分に当たるものと考えられる。それによると、遺構検出面での高石垣の下端幅は約7mに復元される。これと石垣の計測値などから突角部と同様に計算すると、西三ノ丸の高石垣上端幅は5m程度となる。

この突角部と同様な防御施設と見られるものが、福井城においてもう一箇所確認される。それは、北三ノ丸の南西角にて、南側に突状あるいは柵構状に突き出す石垣構造として表現されている(図2・巻頭図版7)。全く同じ表現であり、白壁の塀の表現についても同様である。二つの突角部の位置は、ともに三ノ丸から二ノ丸へ通じる門を側面から直接望むことのできる位置であり、同じ条件の箇所は他にない。そのため、二ノ丸の門の防御施設として、縄張に組み込まれたものと考えられる。

井戸 井戸は9基確認した(図15・16)。そのうち4基(10 1001・1002・1003・1007)は近現代に存続したものと見られ、これらは木製の井戸桶を埋設する。この他に、素掘り井戸・石組井戸などが認められる。また、遺構10 1062は井戸枠が木製と石製による二重構造であり、遺構4 511は上部構造の一部が残るという特徴を備えることから、以下に詳述する。

遺構10 1062(図29)は、木製の井戸桶の上に石製の井戸枠を積み上げて形成される。木製井戸桶は、高さ0.9m前後、直径0.8m前後のものを二段重ねにしており、高さ1.6～1.7mになる。この木製井戸桶上端の高さにて、角材による井桁状の基礎を組み、その上に石製井戸枠が設置される。基礎に使用さ



遺構10-1062

層	土質	土質	炭化物	粘土	植物	断面石 (cm)	その他石 (cm)
1	黒褐色	2.833/1	粘質土				
2	黒褐色	2.833/2	粘質土	少	少	少 (φ0.5-1.0)	
3	灰色	7.534/1	粘質土	少	少	少 (φ1.0-3.0)	
4	灰色	5.94/1	粘質土				
5	灰サソープ色	7.533/2	粘土	少	少	少 (φ1.0-3.0)	少 (φ1.0-3.0)
6	灰色	10.67/1	粘土	少			
7	黄灰色	2.834/1	粘質土	少	少	少 (φ1.0-3.0)	少 (φ0.5-1.0)
8	黄灰色	2.834/2	粘質土				
9	緑灰色	7.533/1	粘質土	少	多		
10	緑灰色	7.533/2	粘土				



図29 井戸① (S=1/50)

图例4-311

层位	剖面图	平面图	层位	剖面图	平面图	层位	剖面图	平面图
1	2.52x1.4	少	1	2.52x1.4	少	1	2.52x1.4	少
2	2.52x1.4	少	2	2.52x1.4	少	2	2.52x1.4	少
3	2.52x1.4	少	3	2.52x1.4	少	3	2.52x1.4	少
4	2.52x1.4	少	4	2.52x1.4	少	4	2.52x1.4	少
5	2.52x1.4	少	5	2.52x1.4	少	5	2.52x1.4	少
6	2.52x1.4	少	6	2.52x1.4	少	6	2.52x1.4	少
7	2.52x1.4	少	7	2.52x1.4	少	7	2.52x1.4	少
8	2.52x1.4	少	8	2.52x1.4	少	8	2.52x1.4	少
9	2.52x1.4	少	9	2.52x1.4	少	9	2.52x1.4	少
10	2.52x1.4	少	10	2.52x1.4	少	10	2.52x1.4	少
11	2.52x1.4	少	11	2.52x1.4	少	11	2.52x1.4	少
12	2.52x1.4	少	12	2.52x1.4	少	12	2.52x1.4	少
13	2.52x1.4	少	13	2.52x1.4	少	13	2.52x1.4	少
14	2.52x1.4	少	14	2.52x1.4	少	14	2.52x1.4	少

砂土

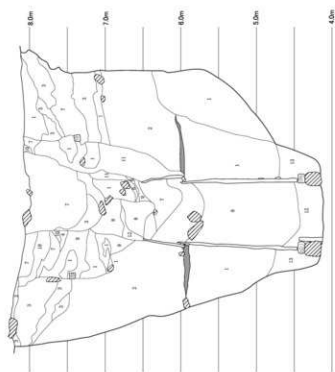
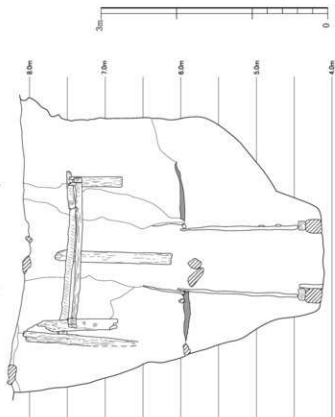
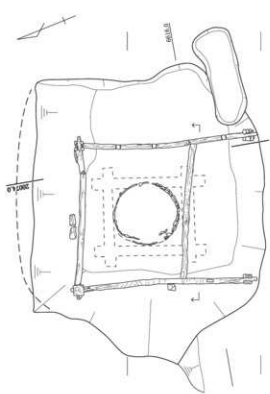


图30 井戸② (S=1/50)

れる角材は、長さ 1 7m前後・太さ 0 15-0 2mで、臍穴を持つ転用材も含まれる。石製井戸枠は、一辺 1 m前後の方形に組み合わせたものを 7 段積み重ねており、その高さは約 2 5mである。使用される石材は、長さ 0 8m前後もしくは 0 9m前後・高さ 0 3m前後・厚さ 0 1m前後であり、聖などによる丁寧な調整痕が認められる。石製井戸枠は、井桁状の基礎とは角度を約 45度ずらして積まれており、最下段の周囲には転倒防止のために大きめの礫が埋め込まれている。井戸枠石材・転倒防止の礫はいずれも笏谷石である。特徴的な遺物として、井戸桶内から木製の手桶を検出した。手桶の取手には中央に円孔があり、釣瓶桶として利用されたものと見られる。この桶は、井戸底面に堆積した灰色粘土層上に乗る位置にあり、底面から 0 3-0 5m浮いた状態で検出した。井戸掘り方は、平面形態は東西にやや長い楕円形を呈し、規模は南北約 2 5m・東西 2 7m、検出面からの深さ約 4 1mである。なお、掘り方壁面の底面から 1 4m前後の部分（標高約 4 2m）に平坦面がある（図 29）が、これは福井地震（1948年）の影響により生じた段差であり、これより上層が南西側へ移動したことにより生じたものである。掘り方北東側では、生じた段差によりオーバーハングとなった部分に、石製井戸枠の井桁状基礎が潜り込んでいた。今回の調査では、おもに東西方向を遺構図化の主軸としたために、土壌の移動方向の僅かな相違により、このような井戸に残る地震の痕跡を図に表すことができなかった。

遺構 4 511(図 30)に残る上部構造の一部とは、上屋の基礎部分である。この井戸の北側は、地下駐車場工事のため確認することができなかったが、掘り方の平面形は一辺 3 5m前後の隅丸方形になるものと見られ、そのほぼ中央に木製の井戸桶が設置される。井戸の底面は検出面から約 4 m（標高 4 1 m）であり、そこに礫および角材を井桁状に組んだ基礎を整備し、井戸桶を積み上げている。基礎に使用される角材は、長さ 1 2-1 5m・太さ 0 1-0 15mのやや扁平なものである。井戸桶は、2段分残存する。下段の井戸桶は高 1 6m前後・直径 0 8-0 9mであり、上段の井戸桶は高さ 0 4-0 6m分が残存するのみである。下段の井戸桶上端の高さに砂利の薄い堆積があるが、これは上段の井戸桶を組み上げるための基礎やその作業の足場となるものと見られる。上屋の基礎は、上屋の 4本の柱を細長い角材でコの字状に繋ぎ、もう一本の角材を渡して変則的な四角形に組むものである。上屋の柱材は太さ 0 15mの角材であり、これに太さ 0 1m、長さ 2-2 4mの細長い角材を組み合わせて基礎としている。上屋の柱とその基礎の設置は、上段の井戸桶を半分程度埋設した時点（標高 7 0-7 5m）で行い、井戸の造成に合わせて埋め込んだものと見られる。なお、堆積状況図によると、上屋基礎の内側を上段の井戸桶分の深さだけ掘った痕跡が認められ、その内側には井戸桶の痕跡も認められる。このことは、上屋を残したまま上段の井戸桶を掘り出して交換し、その後も井戸が存続したことを示すものと捉えられる。

廃棄土坑 内部に多量の遺物が集積する土坑を廃棄土坑とした。集積される遺物は土器・陶磁器、金属製品、石製品など多種にわたるが、とくに木製品など有機質のものが目に付く。廃棄土坑は 12基礎確認した（図 15・16）。これらは小さくとも 2 m前後であり、大きいものは 4 mを超える。また、これらのうちには内部に削り出しによる階段を持つもの（遺構 10 1005・1006A・1036）も認められる。

遺構 10 1005(図 31)は、平面形が東西に長い歪な楕円形を呈しており、その規模は東西約 7 5m・南北約 3 4m・検出面からの深さ 2-2 3mである。西側壁面に 6-8 段の階段が削り出される。一段分の広さは、0 6-0 9m 0 2-0 3mであり、それぞれの段差は 0 2-0 4mである。

遺構 10 1006A(図 32)は、複数の廃棄土坑が重複する（遺構 4 410・10 1006B）。また、遺構 10 1006 A自体は、北東側に取り付く階段に拡幅の状況が認められることから、途中で拡張したことが考えられ

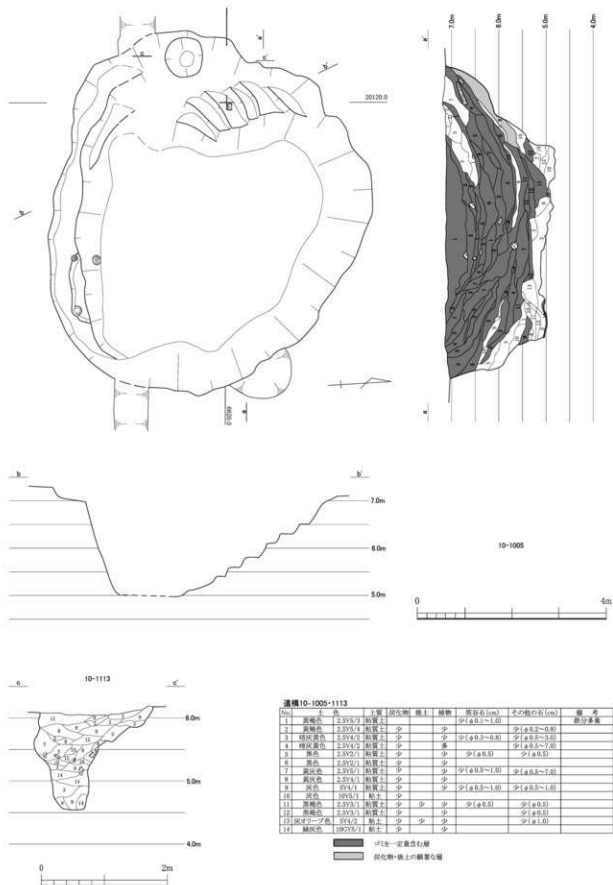
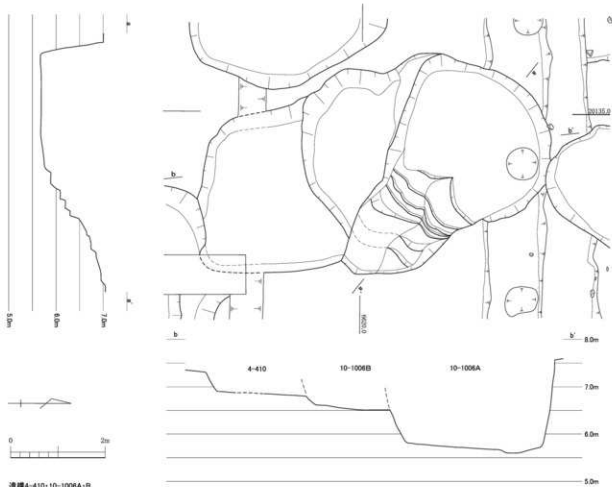
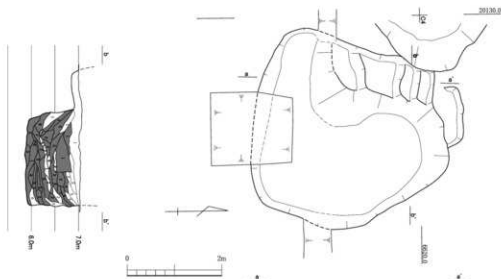


図31 廃棄土坑① (S=1/80・1/50)



遺構4-410・10-1006A-B

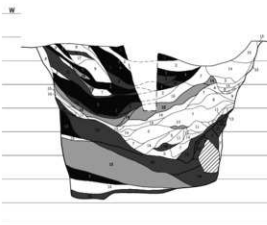


遺構10-1006

No.	土名	土質	色化物	粘土	雑物	貯存量 (cm)	式の物の長 (cm)
1	灰黄色	10YR4/2	貯蓄	少	中	少(貯0.8)	少(貯0.8)
2	緑灰黄色	2.5Y4/2	貯蓄	中	中	少(貯1.0~2.0)	中(貯0.5~2.0)
3	緑灰黄色	2.5Y4/2	貯蓄	中	中	少(貯1.0)	少(貯1.0)
4	緑中褐色	5Y5/2	貯蓄	中	中	少(貯2.0)	少(貯1.0)
5	灰色	2.5Y4/3	貯蓄	中	少	少(貯0.5~2.0)	少(貯0.5~1.0)
6	褐色	10YR4/1	貯蓄	多	少	少(貯0.5)	中(貯0.5~2.0)
7	黒褐色	2.5Y3/1	貯蓄	中	少	少(貯0.5)	

■その顕著な層

図32 廃棄土坑② (S=1/80)

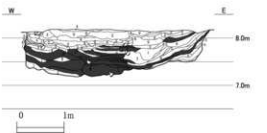


遺構4-401

No.	土色	土質	炭化物	焼土	雑物	厚さ(m)	その他の石(m)	備考
1	暗灰黄色	2.0Y3/2	粘質土	少			少(φ1.0~1.3)	
2	黒褐色	2.0Y2/2	粘質土	少		少(φ1.0)	中(φ1.0)	
3	灰黄色	2.0Y4/2	砂質土	少			中(φ2.0)	
4	灰黄色	10Y5/2	粘質土	中				
5	灰黄色	10Y5/2	粘質土	多				
6	灰黄色	2.0Y3/2	砂質土	少				
7	灰黄色	2.0Y3/1	粘質土	中				
8	灰黄色	2.0Y3/1	砂質土	少			少(φ2.0)	
9	灰黄色	2.0Y3/2	砂質土	少			少(φ2.0)	少(φ3.0)
10	黒色	2.0Y1/2	粘質土	少				
11	オリーブ黒色	0Y3/2	粘質土	多			少(φ2.0~3.0)	
12	暗褐色	7.0Y7/3	砂	少				
13	黒色	0Y1/1	粘質土	少				
14	灰色	0Y6/1	粘質土	少			少(φ1.0~3.0)	
15	灰色	0Y6/1	砂質土	少			少(φ2.0)	
16	灰黄色	0Y7/3	粘質土	多			少(φ1.0)	少(φ3.0)

- ①は一定量含む層
- ゴミの顕著な層
- 土質が①と②の境界層

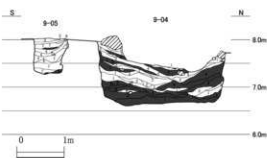
0 3m



遺構4-510A

No.	土色	土質	炭化物	焼土	雑物	厚さ(m)	その他の石(m)	備考
1	暗灰黄色	2.0Y3/2	粘質土	少			少(φ2.0)	
2	暗灰黄色	2.0Y2/2	粘質土	少		少(φ1.0~2.0)	少(φ1.0~2.0)	
3	灰色	0Y4/1	粘質土	少		少(φ2.0)	少(φ0.5~1.0)	
4	灰色	0Y6/1	粘質土	少			多(φ0.5~1.0)	
5	暗褐色	10Y5/2	粘質土	少	中		少(φ0.5)	
6	黒褐色	2.0Y2/2	粘質土	少		少(φ1.0~2.0)		
7	オリーブ黒色	0Y3/2	粘質土	少	少		中(φ1.0~3.0)	炭分量
8	暗オリーブ色	0Y4/1	粘土	少		少(φ0.1~0.5)	少(φ1.0~3.0)	炭分量
9	黒褐色	2.0Y2/3	砂質土	少		少(φ1.0~2.0)	多(φ1.0~10.0)	炭分量

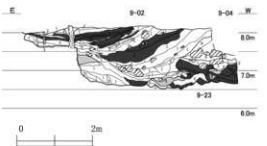
- ゴミの顕著な層



遺構9-04-05

No.	土色	土質	炭化物	焼土	雑物	厚さ(m)	その他の石(m)	備考
1	灰色	0Y5/1	粘質土	少	少		中(φ3.0~5.0)	少(φ1.0~3.0)
2	灰色	10Y5/1	粘質土	少			少(φ3.0~2.0)	
3	暗灰黄色	2.0Y2/2	粘質土	中	少		少(φ1.0~2.0)	
4	暗灰黄色	2.0Y2/2	粘質土	中	多	少(φ5.0~10.0)	少(φ1.0~2.0)	
5	黒褐色	2.0Y2/1	粘質土	中	中		少(φ1.0~2.0)	
6	黒褐色	2.0Y2/2	粘質土	中	中		中(φ3.0~5.0)	中(φ1.0~3.0)
7	オリーブ黒色	0Y3/1	粘質土	中	中		少(φ1.0)	少(φ1.0~2.0)
8	オリーブ黒色	0Y3/1	粘質土	中	少		少(φ1.0~2.0)	

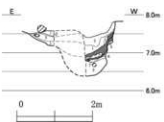
- ゴミの顕著な層



遺構9-02-04-23

No.	土色	土質	炭化物	焼土	雑物	厚さ(m)	その他の石(m)	備考
1	暗オリーブ色	0Y4/2	粘質土	少	少		少(φ1.0~2.0)	少(φ0.5~1.0)
2	暗オリーブ色	0Y5/2	粘質土	少	少		少(φ1.0~2.0)	
3	灰黄色	2.0Y4/1	砂質土	中	少		少(φ0.5~1.0)	
4	灰黄色	2.0Y4/1	粘質土	中	少		少(φ0.5~1.0)	
5	暗灰黄色	2.0Y2/2	粘質土	少	中		中(φ3.0~5.0)	中(φ1.0~3.0)
6	暗灰黄色	2.0Y2/1	砂質土	少	少	多(φ0.5~0.0)	少(φ1.0~5.0)	

- 焼土層
- ゴミの顕著な層



遺構2-228

No.	土色	土質	炭化物	焼土	雑物	厚さ(m)	その他の石(m)	備考
1	オリーブ灰色	2.0Y3/1	粘質土	少	少	少(φ1~3)	中(φ1~3)	
2	灰色	10Y5/1	粘質土	少				
3	灰色	0Y4/1	粘質土	少	少	少(φ1~5)	少(φ0.5~3)	
4	灰黄色	2.0Y4/1	粘質土	中	中			
5	暗褐色	10Y5/1	粘質土	少	中		多(φ1~3.0)	
6	暗褐色	5G5/1	粘質土	少	中	少(φ1~3)		
7	暗褐色	10C4/1	砂質土	少	少			

- 炭化物に土層

遺構10-1078

No.	土色	土質	炭化物	焼土	雑物	厚さ(m)	その他の石(m)	備考
1	暗灰黄色	2.0Y4/2	粘質土	少	少	少(φ1.0~4.0)	少(φ0.5~1.0)	炭分量
2	黒褐色	2.0Y2/1	粘質土	少	少		少(φ2.0~5.0)	

図33 廃棄土坑・柱穴 (S=1/30・1/80・1/100)

る。平面形は、径3m程度の略円形を呈す土坑部分に、長さ1.2m程度・幅0.6-1.8mの階段部分が接続する形態である。検出面からの深さは、1.4-2mである。階段は7段程度確認されるが、一段分の広さは一定せず、それぞれの段差は0.1-0.2mである。

遺構 10 1036(図 32) は、歪な方形の平面形を呈し、その規模は東西 2.8-4 m・南北 3.6-4.2 m・検出面からの深さ 0.8-1.2 mである。西側壁面に4段の階段が削り出される。一段分の広さは、0.7-0.9 m 0.2-0.6 mであり、それぞれの段差は 0.2-0.3 mである。また、土坑北側に 1.1 0.3-0.5 mの平坦面が確認され、これも削平を免れた階段であろう。

遺構 4 401(図 15・33) は、平面形が東西に長い歪な長方形を呈しており、その規模は東西約 4.5 m・南北 3.5-4 m・検出面からの深さ 3.2-3.4 mである。地山削り出しなどによる階段は確認されない。

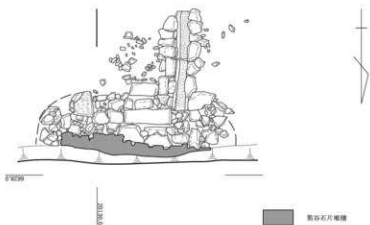
必ずしも大型の廃棄土坑に階段が備えられるのではないようであり、廃棄土坑に階段を備える必要性を鑑みると、階段を備えるものについては当初の性格が異なることを考慮する必要がある。なお、これら大型の廃棄土坑はおもに百間堀西側調査区の中央より東側に纏っており、その位置は、城代屋敷地の表門が西側であることから、建物の裏手に当たるものと見られる。

柱 穴 柱穴は3基礎確認したのみである(図 15・16)。削平のため、いずれも単体で残存しており、建物を構成する状況では確認されなかった。内部に柱根・礎石が残存するのは、遺構 10 1078のみである。

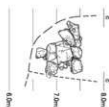
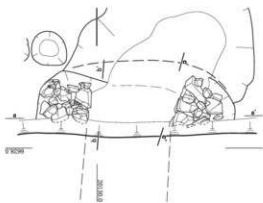
その他 その他の遺構として、石組遺構 10 1032がある(図 15・34)。当初は笄谷石製の樋を備えた水路を主体とする石組遺構と捉えた。この遺構の東側と調査区西端に近代以降の所産と見られる石組水路があり、この遺構を埋め込む笄谷石堆積中に幕末から近代の遺物が見られたため、これについても新しき遺構として早々に解体してしまった。しかし、その下層で検出した石組は、対峙する壁面の状況とその方向性が石垣X付近の階段(図 22) と類似することが指摘される。改めて上層石組を見ると、水路西側の延長上に大きめの石材が並び、その並びの約2m東側に大型の石材が配される。これらは、それぞれ下層石組の直上に接して載っていたものであり、下層石組とともに階段の両側壁を形成したものと判断される。両側壁の間には東西方向に軸を揃えた石材が並んでおり、その状況から階段の踏み石あるいはその土台として据えられた石材である可能性が考えられる。ただし、階段踏み石の残存状況は良くない。これは、近世遺構面の削平や調査区周縁の鉄骨打ち込みのために、移動・撤去されたことによると見られる。性格の確認は、北側に隣接する歩道部分における後世の調査を待たねばならない。なお、下層石組は、東西 4.2 m・南北 1.3 m以上の掘り方の東西両側にて対峙する。東側の石組は石材が4段程度積み重ねられ、その高さは1m程度である。西側の石組は3段程度積み重ねられ、高さ0.8m程度である。両者とも、南端は掘り方の傾斜に沿うように据えられる。また、石組背後に石垣と同様な棄石が充填される。両側壁間は約1.8mである。壁面の方向性は北北東を指向し、石垣Xの延長と直交する。

百間堀西側調査区は、城代屋敷地区とされる一つの屋敷地内に納まる(図 6)。しかし、後世の削平により遺構面が失われ、大型の土坑や深い井戸が幸うじて残存するに過ぎない。そのため、建物配置などの詳細は不明であり、確認した遺構と重複しない位置に建物があったであろうことが推測されるのみである。遺構空白地は、調査区西側の廃棄土坑(遺構 10 1005) と井戸(遺構 4 511A) とに挟まれる部分に展開しており、ここに建物の位置したことが推測される。

(御嶽)



上層



下層



遺構10-1032(石組遺構)

層	土質	土質	土質	土質	土質	土質	土質	土質
1	灰土一ツ色	3Y6/7	砂質	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
2	黄褐色	2.5Y5/3	砂質	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5-1.0)	
3	緑灰色	2.5G4/3	砂質	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
4	黄褐色	10Y3/2	砂質	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
5	黄褐色	10Y3/2	砂質	少	少	少(φ2.0)	少(φ0.5)	
6	黄褐色	10Y4/1	砂質	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	
7	黄褐色	2.5Y4/1	砂質	少	少	少(φ0.5)	少(φ0.5)	

図34 石組遺構 (S=1/80)

百間堀東側調査区 百間堀東側調査区で検出した近世の遺構(図 14・35・36・37)は、石垣・柱穴列(塀)・井戸・池などがある。これらのうち主要なものについて、以下に詳細を記述する。

石垣 百間堀東側の石垣は、西側の石垣と対を為す福井城の最終段階の石垣である(図7・8)。百間堀西側に認められたような複数の石垣の重複はなく、積み直しが為されたとしても、その位置や姿は築城当初から大きく変化していないものと見られる。また、曲輪の背後側に位置する石垣であるため、西側の石垣とは異なり高石垣ではない。

検出した石垣(図 39)は、北東-南西方向に、直線的に延びる。検出した部分の総延長は約 33.5mに及ぶ。石垣石材は概して4石前後が積まれた状態で残存しており、その高さは1.5mを前後する。最も良好に残存する箇所では6-7石程度の石垣石材が残存し、その高さは約2mである。石垣の下端は、概ね標高4.5m前後であるが、全体として北から南へ緩やかに下降しており、部分的に沈み込むためやや波打つような状況である。石材の寸法や積み方など様相の似通ったものの単位で石材下端が揃うように認められ、作業工程の違いなどが反映していることが考えられる。

石垣の基礎構造は、直下に笏谷石砕片がまばらに敷かれるのみで、胴木組は残存しない。あるいは胴木組の備えられなかったことも考えられる。根石の正面には、笏谷石砕片を含む厚さ0.2m程度の黒色粘質土が被せられる。

石垣に使用される石材は、いずれも笏谷石であり、小振りで歪な形状のものが多い。粗割り成形が為されるが、自然面をそのまま残しているものが多い。一部に比較的整美に整えられた石材が使用されるが、調整・積み方など他とは大きく異なり、新たに積み直されたものであることは明らかである。石垣正面は、いずれも平坦に削られ、鑿などによる調整痕の残るものも認められる。しかし、笏谷石の石質上、表面が剥落し、さらに磨耗したような状態の石材が多い。比較的整美な石材は、寸法・形状ともに石垣の石材と同様である。しかし、積み直す際に新たに手が入られ、打ち込み接ぎを志向した石垣として積まれる部分も認められる。根石に使用される石材は、より小振りのもや鑿調整を省略気味のもの認められる以外は、この石垣に使用される整美な石材以外の石材ととくに相違するものではない。

各石材の石垣正面における寸法(表 37)は、高さ0.1-0.59m・横幅0.2-1.1mと大きなばらつきがあるが、そのうち高さ0.3m前後・横幅0.4-0.9mを正面寸法とする石材が多い。この寸法は、石垣の石材よりは小振りであるが、石垣と同等である。石材寸法は、高さ0.25-0.3m・横幅0.4-0.45m・奥行0.6m前後の範疇に含まれるものが多い。これは、石垣の石材より小さいが、石垣に多く見られる石材寸法の範疇に小さい部類として辛うじて入る寸法である。

刻印は、石垣石材187点中12点に、8種類を確認した。これらは6-8mの間隔をあけて、単独種あるいは複数種の刻印が配置されている。墨書などは確認されなかった。

石垣は孕みが著しく、そのままでは自立さえも困難な状態である。石材が飛び出したり、引っ込んだりするのは、標高5.0m付近に認められる横目地の上下の石材である。石垣前面には笏谷石の堆積が二重に展開しており、その堆積の上面は標高5.0m前後である(図7・13)。後からの堆積は百間堀埋め立ての際に崩れたものと見られるが、図面で確認する限りその堆積は薄く、それ以前の時点で標高5.0m付近に達していたようである。先の堆積が起きた時期は明らかにし得ないが、その堆積中に崩落した石垣石材が認められることから、石垣の部分的な崩壊のあったことが窺える。その後、この堆積の上面にて石垣が再構築され、その際に生じた埋没した石垣との平面的な誤差が、孕みのように見えるものと考

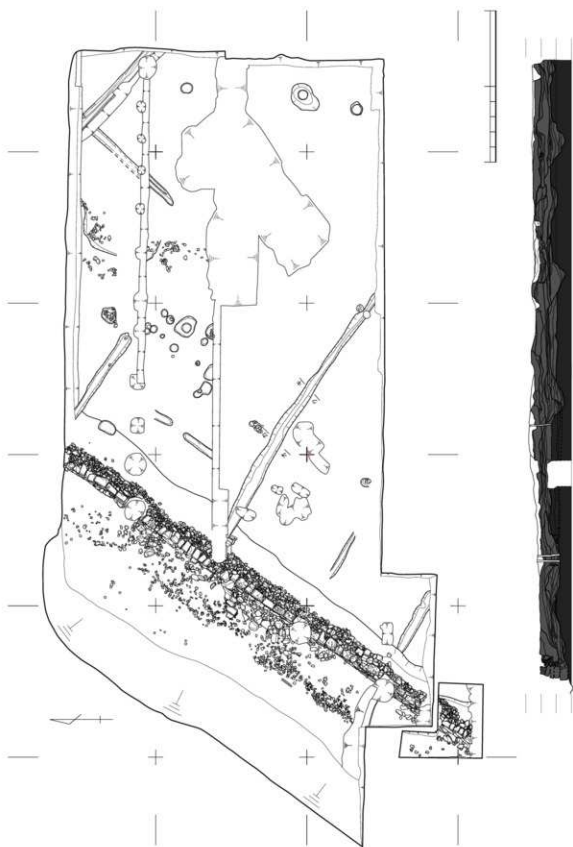


图 百闻塔东侧调查区 遺構配置 (S=1)



図36 百間堀東側調査区 遺構配置② (S=1/250)

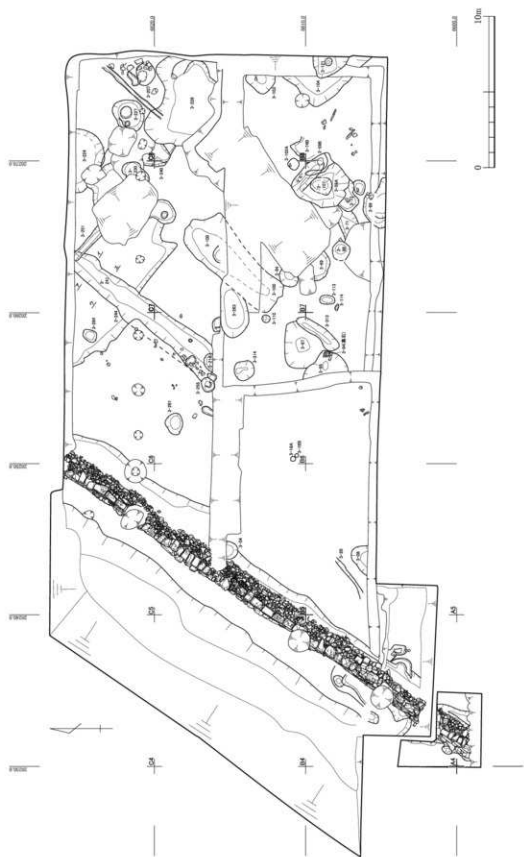


図37 百間堀東御講査区 遺構配置③ (S=1/250)

える。この石垣の天端は、残存する石材や石垣背後の状況から、標高 7 0mを下らない位置であったと見られる。再構築時の石垣設置面はほぼ標高 5 0mであるため、見かけの石垣の高さは 2mを超える程度のものとなる。

なお、絵図などにより、この石垣の背後に沿う道路の存在が確認され（巻頭図版7・図2・6・27）その情景を表すものとして「紙本馬威図六曲屏風（福井県立歴史博物館 所蔵）」がある（図 38）。これには、百間堀や御菜園の状況とともに、百間堀東側石垣に沿う砂利敷道路を徒歩あるいは馬上の武士たちが行き交う様子が描かれる。正月神事である左義長の一環として行われた馬威し（左義長馬）を描く図の背景であるため、省略されている箇所があるものの、当時の石垣周辺の姿を伝える資料である。



図 38 百間堀東側の情景（「紙本馬威図六曲屏風」福井県立歴史博物館所蔵）

検出した百間堀東側石垣の南端部分（FKJ06 11）は、地下駐車場建設工事に伴う発掘調査が終了し工事が進捗する中で、急遽持ち上がった石垣展示の構想に対応するため、新たに発掘調査を実施した部分である。石垣展示の事業は、福井土木事務所が文化課文化財保護室などの助言を受けつつ行ったものである。当センターは、破壊を伴う開発行為と同様、記録保存のための発掘調査を実施し、その成果を提供したのみである。展示にあたって、石垣は、現地や周辺で出土した石材を使用して組むこと、調査で確認した位置・深さに組むこととされた。また、過去の調査や文献などを基に推定される石垣の高さや百間堀の水位、背後の道路などを再現・表示することが、追って加味された。しかし、標高 5 0m付近に孕みを見せる検出した状況で石垣を復元した場合、本来の高さまで積み上げることは困難とされ、積み方の再考が図られた。果たして、孕みは修正され、納まらない石材は除去され、新たな石垣が構築されることとなった。この展示スペースは、2007年5月9日に完成した。なお、本報告では、百間堀の水面の高さを標高 5 0m前後と推測しており、その展示に表示される水面の高さとは異なる。（御嶽）

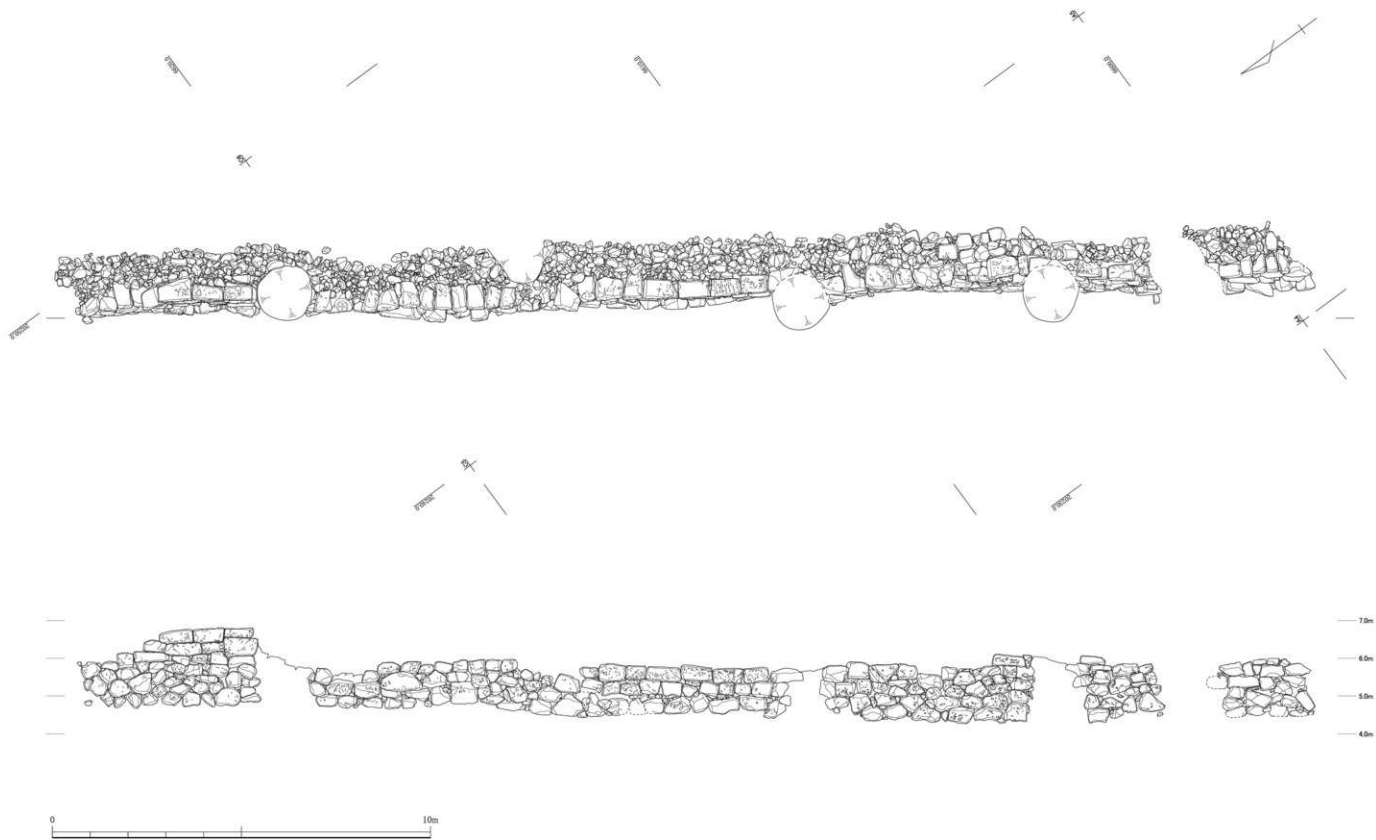


図39 百間堀東側石垣 (S=1/100)

柱 穴（堀） 短径が 0.5m 程度の小穴である。正面の百間堀に対し直角もしくは平行して並び、「福井城下絵図」（以下「絵図」）類と比べても方向的に齟齬はない（図 6・36・40）。

柱列 A・B は、中央を大きな攪乱に分断されるが、本来同一の柱列と考えられる。柱間はやや差があるがほぼ 1.3m 間隔で、攪乱部分も等間隔に 4 箇所補えば一連で繋がる。

柱列 C は、柱列 A・B にほぼ重なるため立て替えであろう。柱穴の遺存状況が悪いため復元が難しいが、柱列 A・B より柱間は広がったと考えられる。また、柱列 A に切られるため、柱列 C は柱列 A・B より古いと考えられる。

柱列 D・E・F は、柱列 A-C とほぼ直角に交わる。柱列 E は、柱列 B の遺構 358 を共有するため同時期であろう。柱列 A・C とは柱を共有せず、少し直角とはいかず振れるため別時期と考えられる。柱穴が他と比べ大振り、柱を巻くように石をしっかりと入れてあること、表通りに面して位置することなどから、屋敷表の堀若しくは門とも考えられる。柱列 F も角度が振れるが、柱列 C などと共存する可能性もある。

さて、柱穴を子細にみると、礎石により 3 種類に分類される。すなわち、小穴底に笏谷板石を据える掘立礎石と呼ぶべきもの・笏谷石の礫や屑石を埋土に混ぜるように入れたもの・通常の素堀のものが見られる。ただし、1 つの柱列で 1 種類の形式に統一されていない。柱列 A と柱列 B は同一の軸線上ながら、柱列 A は石を込め、柱列 B は遺構 360 以外素掘りである。これは部分修理や改造などにより変化が生じたためとも考えられる。

溝状遺構 遺構 301 は、正面の百間堀に対して直角に交わる素掘り溝である。溝は道路上を横切り百間堀へ流れ込む。道路上は、交通を阻害しないために板などにより蓋をされていた可能性もあるが、そのような痕跡は確認できなかった。遺構 306 および 3208 もほぼ同間隔で 301 に並行する。遺構面の遺存状況が悪いため遺構の正確な幅・深度は記録できなかったが、現状幅は約 0.6m、深さは 0.4m 程度で薬研掘りに近い断面形状であるが、これらの特色も 306 および 3208 と同様である。屋敷地内の排水や道路上の水捌け用と考えられる。（図 35・41）

遺構 3241 は百間堀と約 10m を隔て並行する。遺構面が荒れており正確な幅・深度は記録できなかったが、現状幅は約 1.6m、深さは 0.6m 程度で、断面形状は逆台形である。遺構 3241 の位置は「絵図」による道路と屋敷の境に合致することから、境界の溝と考えられる（図 37・41）。また、出土物から築城間もない頃に作られ、あまり時間を経ず埋め立てられたと思われる。

井 戸 調査区北東部、屋敷内では西隅角に集中する（図 36・37）。

遺構 3213 は、2 つの井戸（3213B・C）と廃棄土坑（3213A）が重複していた（図 42）。最初に掘削された井戸は 3213C である。3213C は、底部 0.5m 程度を残して、3213B の掘方の攪乱を受けていた。最深部の標高は約 3.8m を測る。井戸側は残っており、抜き取られた可能性もある。また、3213C の埋土中からは遺物が出土せず、その掘削・廃絶時期は不明である。

3213C を埋め立てた後、約 1m 北西に改めて掘削された井戸が 3213B である。3213C よりも約 0.7m 深く、湧水のあるシルト層を掘り込む。3213B の掘削中、湧水による掘方壁面の崩落を防ぐために、周囲に 2 段の土俵を積み、さらに杭を打ち止める。井戸側は桶を 2 段に接く。下段桶は高さ約 1.8m であるが、上段桶は上部を 3213A により破壊されるため、残存高約 1m である。桶材の板幅が上段

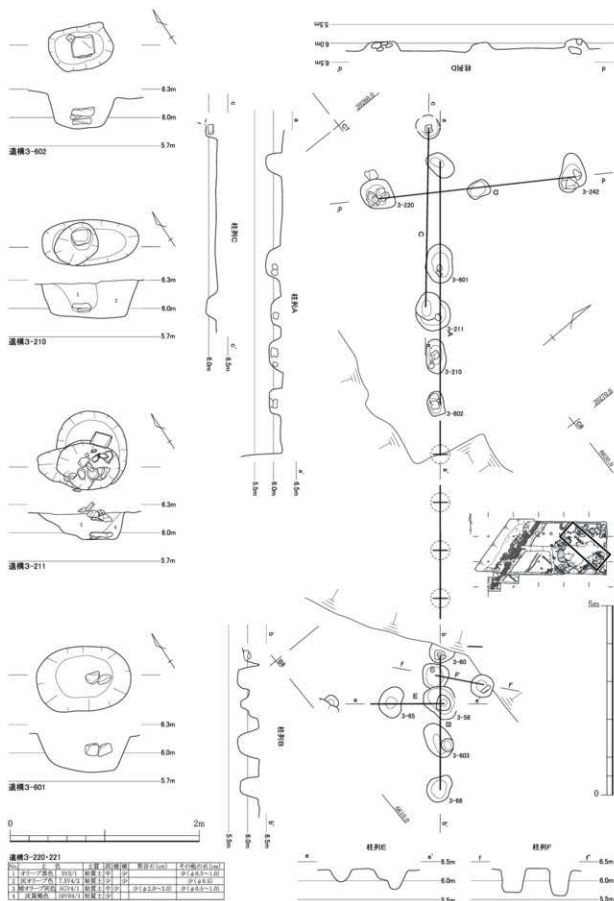
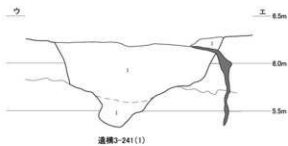
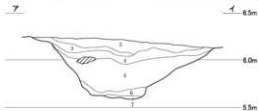


図40 柱列(塀) (S=1/40・1/100)



遺構3-241(1)

灰色 5YR/1 粘質土 少 中 少(φ1.0~2.0) 中(φ1.0~3.0)

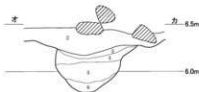


遺構3-241(2)

遺構3-241

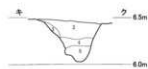
No.	土 色	土質	炭化物	焼土	植物	磨砕石(cm)	その他の石(cm)
1	灰オリーブ色	5Y3/2	粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ1.0~3.0)
2	灰オリーブ色	5Y3/2	粘質土	中	中		
3	灰オリーブ色	7.5Y3/2	粘質土	少			
4	灰色	N5/0	粘質土	中	中		少(φ0.5~1.0)
5	緑灰色	10G3/1	粘質土	少	少	少(φ0.5~2.0)	
6	灰色	N5/0	粘質土				
7	灰オリーブ灰色	5Y3/1	粘質土				

■ 硝子



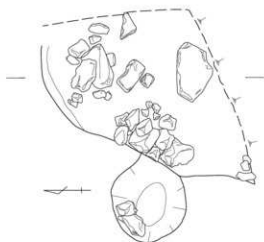
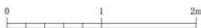
遺構3-01A

No.	土 色	土質	炭化物	焼土	植物	磨砕石(cm)	その他の石(cm)
1	灰オリーブ色	7.5Y3/2	粘質土	中	中	中(φ0.5~2.0)	中(φ1.0~3.0)
2	灰色	5Y3/1	粘質土	少	少	少(φ1.0~2.0)	少(φ1.0~2.0)
3	緑灰色	10G3/1	粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~2.0)
4	灰色	5Y3/1	粘質土	少	中	少(φ0.5~1.0)	多(φ0.5~2.0)
5	灰オリーブ色	5Y3/1	粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	



遺構3-01B

No.	土 色	土質	炭化物	焼土	植物	磨砕石(cm)	その他の石(cm)
1	灰オリーブ色	7.5Y3/2	粘質土	中	中	中(φ0.5~2.0)	中(φ1.0~3.0)
2	灰色	5Y3/1	粘質土	少	少	少(φ1.0~2.0)	少(φ1.0~2.0)
4	緑灰色	10G3/1	粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	少(φ0.5~2.0)
5	灰色	5Y4/1	粘質土	少	中	少(φ0.5~1.0)	多(φ0.5~2.0)

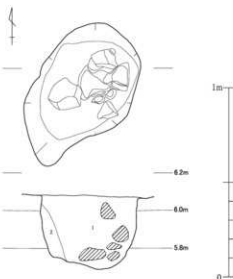


遺構3-02



遺構3-72

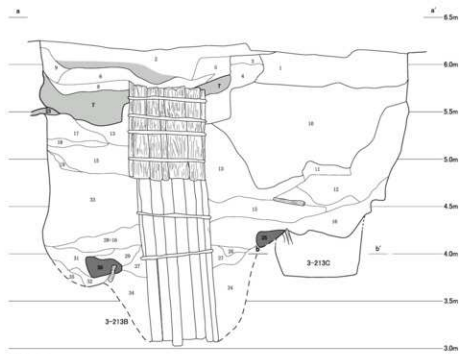
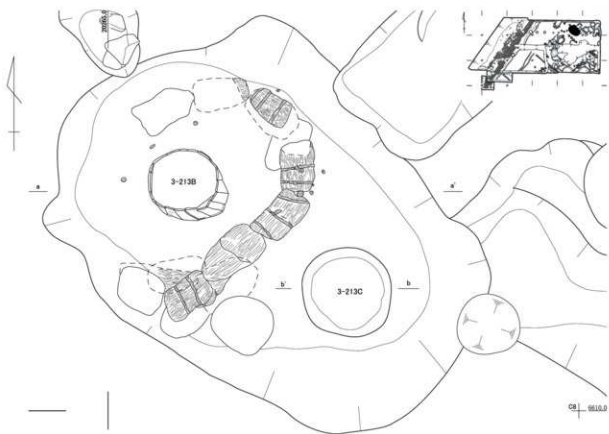
No.	土 色	土質	炭化物	焼土	植物	磨砕石(cm)	その他の石(cm)
1	緑灰色	7.5Y4/2	粘質土				
2	灰オリーブ色	5Y3/2	粘質土	中	中		少(φ1.0~3.0)
3	灰オリーブ灰色	7.5Y3/2	粘質土				



遺構3-81

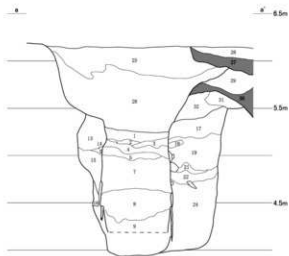
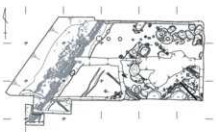
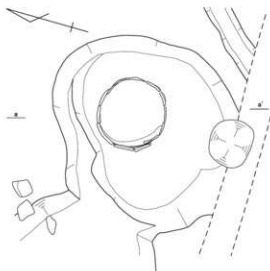
No.	土 色	土質	炭化物	焼土	植物	磨砕石(cm)	その他の石(cm)
1	灰色	10Y4/1	粘質土	中	中		
2	緑灰色	5G5/1	粘質土				少(φ1.0~2.0)

図41 溝・柱穴・集石 (S=1/40・遺構3-81のみS=1/20)



遺構3-213

図42 井戸 (S=1/40)

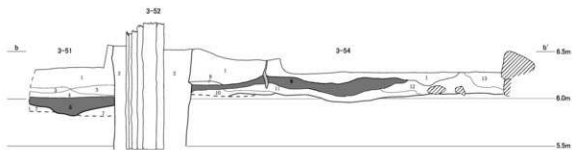


遺構3-22b

No.	土名	土質	図記号	層上	層厚(m)	寸法の広さ(m)	備考
1	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土		少(4.85-1.0)		建物内蔵
2	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
3	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少(4.85-4.0)		建物内蔵
4	黒褐色	IV3/2	粗壁土	多	多	少(4.85-4.0)	建物内蔵
5	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少	少(4.85-1.0)	建物内蔵
6	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
7	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少(4.85-1.0)		建物内蔵
8	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
9	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
10	黒褐色	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
11	黒褐色	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
12	黒褐色	IV3/2	粗壁土	少	少		建物内蔵
13	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少	少(4.85-1.0)	
14	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		
15	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		
16	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		
17	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		
18	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		
19	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		
20	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		
21	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		
22	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少(4.85-1.0)		
23	黒褐色	IV3/2	粗壁土	少	少		
24	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少(4.85-5.0)		少(4.85-1.0)
25	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
26	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
27	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
28	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
29	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
30	黒褐色	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
31	黒褐色	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)
32	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少		少(4.85-1.0)

遺構3-22c

● 灰土一斗色層上



遺構3-051-052-054

遺構3-51-54

No.	土名	土質	図記号	層上	層厚(m)	寸法の広さ(m)	備考
1	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	少	少(4.85-1.0)	少(4.85-1.0)	灰土の層上
2	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少(4.85-1.0)	少(4.85-1.0)	
3	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	中	中(4.85-3.0)	中(4.85-2.0)	
4	灰子一斗色	IV3/2	粗壁土	多	多	多	
5	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少	少(4.85-1.0)	遺構11
6	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少	少(4.85-1.0)	遺構11
7	灰土	IV3/2	粗壁土	少	少	少(4.85-1.0)	遺構11

● 灰土一斗色層上

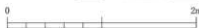
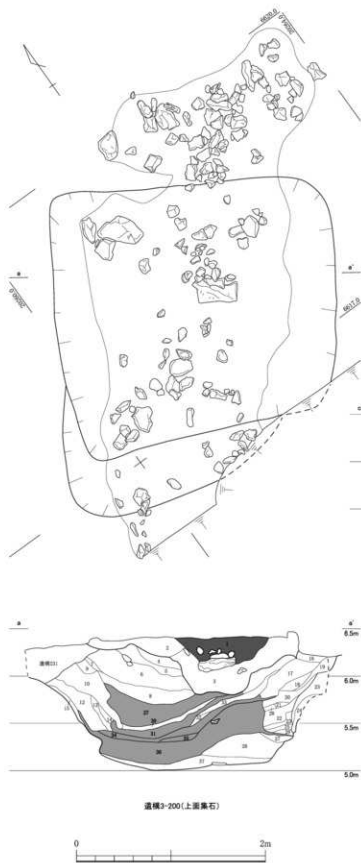


図43 井戸・池 (S=1/40)



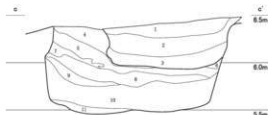
遺構3-204A

遺構3-204A

No.	土名	土質	同位相	厚さ(m)	その横の幅(m)
1	オリーブ色	3Y5/4	粘質土	少	中(±1.0~2.0)
2	緑黄色	2.5Y4/2	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
3	黒褐色	10Y2/2	粘質土	多	中(±1.0~2.0)
4	黄灰色	10B5/1	粘質土	少	中(±1.0~4.0)
5	緑褐色	10G4/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)
6	緑褐色	5Y5/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
7	暗黄灰色	10Y4/1	粘質土	中	中(±3.0~7.0)
8	暗黄灰色	10Y4/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)

遺構3-219

No.	土名	土質	同位相	厚さ(m)	その横の幅(m)
1	オリーブ灰色	10Y5/1	粘質土	少	中(±2.0~3.0)
2	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±1.0~3.0)
3	黒褐色	10Y2/2	粘質土	多	中(±2.0~3.0)
4	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
5	灰褐色	5Y/1	粘質土	中	中(±1.0~3.0)
6	灰褐色	5Y/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
7	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
8	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
9	オリーブ灰色	10Y5/1	粘質土	中	中(±2.0~3.0)
10	灰黄褐色	10Y4/2	粘質土	多	中(±2.0~4.0)
11	黄オリーブ灰色	10Y5/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)

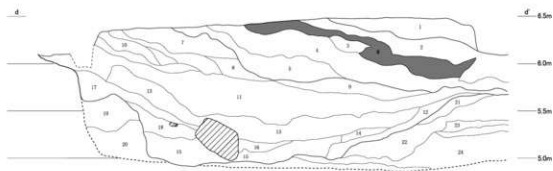


遺構3-219

遺構3-200

No.	土名	土質	同位相	厚さ(m)	その横の幅(m)
1	オリーブ灰色	10Y5/1	粘質土	多	中(±3.0~10.0)
2	灰褐色	5Y4/2	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
3	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±2.0~3.0)
4	暗オリーブ色	5Y4/2	粘質土	少	±(±0.5~1.0)
5	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
6	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	中	中(±1.0~3.0)
7	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
8	緑褐色	10Y3/1	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
9	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
10	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
11	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
12	灰褐色	5Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
13	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
14	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
15	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
16	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
17	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	少	中(±3.0~7.0)
18	暗黄色	10B4/1	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
19	暗黄色	10B4/1	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
20	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
21	灰褐色	10Y4/1	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
22	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±0.5~1.0)
23	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
24	黄褐色	10B4/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)
25	緑褐色	10Y3/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)
26	灰オリーブ色	10Y5/2	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
27	緑褐色	10Y3/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)
28	灰褐色	10Y4/1	粘質土	少	中(±1.0~2.0)
29	暗オリーブ色	10Y5/2	粘質土	多	中(±2.0~3.0)
30	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
31	オリーブ灰色	10Y5/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
32	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
33	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
34	黄褐色	10Y4/2	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
35	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
36	黄褐色	10Y4/2	粘質土	多	中(±1.0~3.0)
37	灰褐色	10Y4/1	粘質土	中	中(±1.0~2.0)
38	黄褐色	10Y4/2	粘質土	少	中(±1.0~2.0)

図45 土坑 (S=1/40)



遺構3-228

遺構3-228

No.	土色	土質	図例	層厚(㎝)	その他の層(㎝)	備考
1	灰オリーブ色	砂質土	少		少(φ1.0~2.0)	盛土層
2	灰オリーブ色	粘質土	少		少(φ0.5~1.0)	盛土層
3	灰オリーブ色	粘質土	少		少(φ0.5~1.0)	盛土層
4	灰オリーブ色	砂質土	中	少(φ1.0~5.0)	少(φ1.0~2.0)	盛土層
5	緑灰色	砂質土	少		少(φ1.0~2.0)	盛土層
6	緑灰色	砂質土	中	少(φ1.0~5.0)	少(φ1.0~2.0)	盛土層
7	緑灰色	粘質土	少		少(φ1.0~2.0)	盛土層
8	黄灰色	粘質土	少	少		
9	緑灰色	粘質土	少			
10	灰オリーブ色	砂質土	中	少(φ1.0~5.0)		
11	黄褐色	粘質土	中	少(φ1.0~5.0)		
12	灰オリーブ色	砂質土	中	少	少(φ0.5~1.0)	

■ 有機物(ワケ)

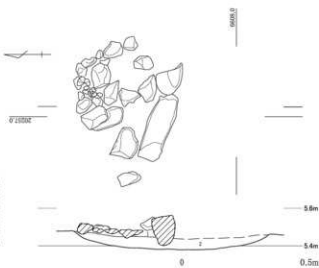
No.	土色	土質	図例	層厚(㎝)	その他の層(㎝)	備考
13	緑灰色	180Y/1 粘質土	少		少(φ2.0~3.0)	
14	緑灰色	180Y/1 粘質土	中			
15	緑灰色	180Y/1 粘質土	中			
16	灰オリーブ色	20Y/1 粘質土	中			
17	オリーブ色	5Y/4 粘質土	少			
18	緑灰色	7.5Y/5/1 粘質土	中	少		
19	緑灰色	7.5Y/5/1 粘質土	中			
20	黄褐色	10Y/4/1 粘質土	少			○→3層(厚さ不明)
21	灰オリーブ色	5Y/2 粘質土	少			○→3層(厚さ不明)
22	灰オリーブ色	10Y/2 粘質土	少			○→3層(厚さ不明)
23	緑灰色	10Y/1 粘質土	中			○→3層(厚さ不明)
24	緑灰色	10Y/1 粘質土	中	少(φ1.0~2.0)		○→3層(厚さ不明)



遺構3-212

遺構3-212

No.	土色	土質	図例	層厚(㎝)	その他の層(㎝)	備考
1	緑灰色	180Y/1 粘質土	少		少(φ0.5~1.0)	中(φ1.0~2.0)
2	緑灰色	30Y/1 粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	
3	緑灰色	30Y/1 粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	
4	緑灰色	10Y/1 粘質土	少	少	少(φ0.5~1.0)	
5	灰オリーブ色	7.5Y/5/1 粘質土	中		少(φ1.0~2.0)	
6	緑灰色	180Y/1 粘質土	少	中	少(φ1.0~2.0)	
7	灰色	7.5Y/5/1 粘質土	中	少	少(φ1.0~2.0)	



遺構3-14

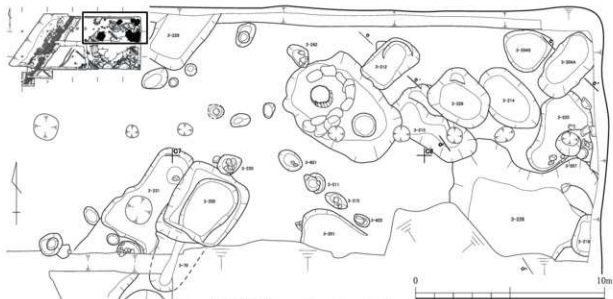


図46 土坑・集石 (S=1/20・1/40・1/50)

の中で興味深い(図 45・46)。遺構 3 220も切り合いが多く、まず遺構 3 231が切り、さらに3 231を含めて3 220新が切る。断面図東側の土層が乱れるため、今ひとつ別遺構の可能性も考えられる。また、3 220新を埋め立てる最上層に笏谷石礫を撒くのは、捨て場機能終了時、今度は地面が沈下しないようにとの意図であろうか。笏谷石は総て埋め込まれ、生活面に顔を出すことはないと思われるが、笏谷石の平面状況も図示しておく(図 45・46)。遺構 3 228は、ゴミ層を切り込みゴミ穴を作る様相で、遺構の肩を確定するのが困難であった(図 46)。遺構 3 212は平面長方形で、長軸を百間堀の方向に合わせる(図 36・46)。

百間堀東側調査区では、部分的だが「絵図」に描かれる屋敷境施設や石垣と、描かれていない屋敷内の空間的復元のための資料を得た。以下、時期ごとに調査区内の変遷を、推定を加えながらみていこう。

17世紀初期 街区に関わる遺構では、百間堀は創建当初から石垣がほぼ変わらない位置に築かれたと思われる。石垣の根石は古い様相を示す。道路は砂利敷舗装面が攪乱により全く確認できなかった。しかし、屋敷と道路を区画する溝 3 241から、道路幅は近世を通じほぼ5間と考えられる。なお、溝 3 241の南半は、堆積状況でも確認できなかったため、溝は途切れていたと考えられる。A・B屋敷の境界は確認できなかったが、「北庄家中図」ではA屋敷の表幅が「28間」と記され、以降の絵図と3間(約6m)の差がある。溝 3 241の途切れる部分が柱列Aより3間に当たり、その関係が興味深い。

17世紀中期 最も遺構が多いが、総て同時に並存したとは考え難い。とくに廃棄土坑(ゴミ穴)は切り合いが激しく、正確な変遷は追えない。柱列A・Bは、A・B屋敷の境と考えられる。柱穴から掘立式1本列柱の木堀で区画される。柱間は1間より狭く約1.3mである。既往の調査でも屋敷境に同様の遺構が多数確認されていることから、福井城の標準仕様と考えられる。A・B屋敷とも角地にゴミ穴が集積しており、裏勝手部であることを示す。

A屋敷に認められる井戸 3 213や3 226の集中は、水の供給の場として固定化した位置にあり、台所が至近であることも想像させる。また、井戸とゴミ穴が同一場所に共存していることは、衛生面や空間利用の思想を考慮する上で非常に興味深い。

B屋敷は屋敷表から15mに、柱列E・Fが屋敷境柱列A・Bに対して直角に延びる。遺構 3 54の石積みもこの柱列E・Fの延長上に位置し、E・Fラインの東西で空間分離を行っている。道路→E・Fライン間には大形の廃棄土坑が多数存在する。一方E・Fラインより東は、調査できた面積が狭いため不明だが、西側の「裏」的空間に対して、「表」に続く空間ではないかと推定する。なお、遺構 3 50はゴミ穴だが、覆土に焼土を含むことから大火後の片付けと考えた。

19世紀 寛文の大火(1669年)後、「屋敷地」から本丸の延焼を防ぐための「御菜園=(火除け空地)」へと大転換し、以後幕末まで変化はない。絵画資料では松林として描かれるが、調査では詳細は掴めなかった。ただ、御菜園内から百間堀に向け、等間隔に素掘り溝を配し、水捌けへ配慮する状況が確認された。

(河村)

2. 遺物

土器・陶磁器

近世（福井城期）出土遺物の時期は江戸時代前半に集中する。食器では肥前系陶磁器が中心である。但し、他調査地点に比べ中国製品の多いことが目立つ。貯蔵具・調理具等は越前焼が独占に近い状態である。本頁ではまず産地ごとに概要を述べ、挿図版では一括性を重視し遺構ごとに編集した。

なお、石垣 出土遺物は総て中世に属するが、挿図版では遺構帰属時期を優先し記載する。

1) 唐津焼（肥前陶器）； 碗・皿等食器類が中心である。大皿（大平鉢）も多く、絵唐津（1006 14）・三島手（3213 3）素紋（350 11 10 1005）や二彩刷毛目のもの等見られる。1006 15は青磁釉で胎土が緻密で磁器に近いが、灰褐色の胎土により濁った色調となり、外面腰部以下を露胎とすることから陶器に分類した。貯蔵具として甕・壺・徳利類がみられる。大別すると、ロク口等使用した緑彩（303 3）・二彩や印花装飾を施した器壁の厚いもの、内面に同心円や格子紋の当て具痕を持つ叩き技法による器壁の薄いもの（1006 17）がみられるが、いずれも出土数は多いが殆どが細片のため図化し得るものは少ない。播鉢は極めて少なく、この分野は地元越前焼が強い。食器類中茶道具として作られたと考えられるものに白色胎土に透明釉を掛け、青緑釉を部分的に流した碗（1005 8・1006 11）は、青磁部を指向する。上作とは言えないが、高台に見所をつくことから茶碗と考えられる。1005 16・1010 3は天目形碗である。1006 10は逆台形の特異な形態で高台内まで施釉する。

2) 伊万里焼（肥前磁器）； 碗・皿等食器類が中心である。時期的には17世紀前半から後半を中心だが17世紀前半が遺構により纏まって出土のする例が他地点と比べ多い。1005 1・2 1006 1・2 354 2は鉢というべき大振りなもので、高台は低く抑えられる。1006 2は内外に細かに筆致で文様が描かれる。特に外面の竹林に虎（豹）図はおおらかさを湛え、李朝染付を思わせる。1005 3は山水紋を描く筒形碗だが同時期のとしては小振りである。354 1は天目形で草花紋を施す。皿は碗に比べると少量である。砂目積みで軟質の胎土、圏線のみ染付されたもの（401 13・403 2・1005 26）は福井城下の調査では多く見受ける（国際交流会館地点・4号線地点など）。口径的には4寸前後のものが多い（351 3・350 7・3213 2）。7寸径の350 10のような大振りなものは今回の調査では伊万里では極めて少なかった。その他の器種では350 12は唐草を刻紋し青磁釉を掛ける。内面は露胎のため香炉であろうか。堀 1は白鳥形の合子の蓋である。形作りでくちばし・目等染付で表す。大きさから茶道具の香合とおもわれる。

3) 瀬戸美濃焼； 主に食器、茶器が多い。他産地に比べ少数だが天目茶碗の占める割合は大きい。連房式登窯期の天目茶碗は多く、遺構 10 1005では複数出土している（1005 13・14・17・18）。鉄釉丸碗も他の調査地点に比べ出土量が多く、天目茶碗とともに一緒に出土することが多いことから共用されていた可能性が考えられる。茶入は細片も加えたと他の調査地点よりやや多い。3208 1は飛鳥川手の撫肩だが小振りで見所は少ない。1005 34は尻膨形であろうか。401 28は鉄釉を掛けた合子である。細片のため全容は不明ながら口作りや大きさから甕と考えられる。志野、織部、御深井の茶陶関係も少数ながら目立つ。1010 6は灰志野の釉調の御深井脚付き鉢である。器体外面に丁寧な刻紋を施す。1010 1は染付筒碗である。17世紀前半の伊万里筒碗を写したと考えられ大振りである。3226 2は四方向付だが鼠志野は珍しい。四面に柳、水車などを表す。904 5は黒織部沓茶碗である。上記桃山茶陶とは別に磁器写しも多くみられる。1005 27・28は志野釉を高台内まで掛け白磁を模す。1010 12・1036 2は灰釉を掛け、高台部露胎ながら鋭い作りである。

4) 京焼； 軟質施釉陶器は幾つかの廃棄土坑から出土しているが細片のため図化し得るものは皆無に

等しい。354は茶系茶碗高台である。内外とも銀化しているが高台内を含む内外面漆黒の黒楽（写し）である。1層 16は色絵四方火入れである。松を錆・呉須で釉下彩とし、桜を青・緑等で上絵付する。品のある絵柄や青・緑主体の色調等京焼の特色を示す。出土地点から18世紀以降と考えられる。

5) 越前焼； 播鉢、甕、壺等みられる。播鉢は口縁部が断面三角形の鋭角な17世紀代のもので中心である。17世紀初期の口縁下に浅い圈線の付くものは極めて少なかった。外面に顕著な轆轤目を現したもの（350 13）は17世紀後半以降の遺物と共存する。401 32は口縁外へ張り出す。類似したものが稀にみられるが断面三角のバリエーションか。口縁が内傾する201 3・1036 4もみられるが少数である。17世紀前半から中頃、寛文大火以前に時期が限定される遺構が多いためこの時期の資料となり得よう。甕類は図化し得るものは極めて少なかった。壺類はお歯黒壺の様な小壺が多い。401 34は耳を2つ持ち、体部は通常に比べ細身である。1010 10は体部に張りがあり、底部が厚いため手取りは重い。

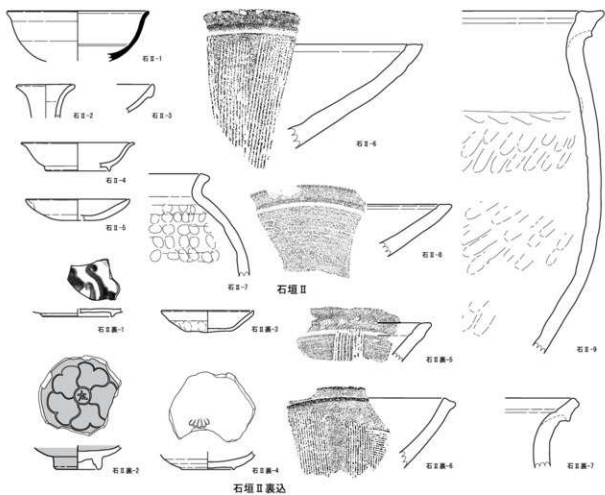
6) 備前焼系； 極めて少ないが他地点の調査でも一定量出土する。902 6は播鉢である。片口を作り、幅広の口縁帯を回す。3228 1は三角錐で正面にカセ胡麻が掛かり備前らしい見所を備えるが極端に小さく、口の内径も3mmと小さく酒器や花入、振り出しにも不適である。底部に扇形印を捺す。

7) 信楽焼； 播鉢 3213 4は口縁帯を持ち2本の沈線を巡らせる。畑中編年3期中段階（畑中英二『続・信楽焼の考古学的研究』平成19年）に比定されよう。

8) 土師質土器； 皿は大半が油煙の付いた灯明皿である。百間堀西側では17世紀前半の遺構が多いことから形式的には一乗谷朝倉氏遺跡C・D類の系譜を引き、バリエーションは少ない。百間堀東側では17世紀後半、「寛文の大火」に関連する遺構出土品は西側と様相が異なりバリエーションが増える。土師質皿の分類は紙数の関係上別に譲る。354 11は低い脚を3つ持ち、肩部に現状1箇所吹き風に格子状の押し印が入る。上部に薄く緑釉を掛けるが剥落も多い。灰器であろう。

9) 貿易陶磁； 産地は中国・ベトナム（南蛮）等。器種は碗・皿・向付・杯・壺等の調査地点に比べ豊富で、国産陶磁に対する比率も若干高い。中国製品はそのほとんどが染付（青華）である。器種毎にみてゆくと、碗は器壁の薄い景德鎮系と厚い呉須手系（401 16 1005 7 1層 15）に分かれる。器形は碗形中心だが1006 6は端反である。皿は口径4寸前後のものが中心である。遺構 10 1005・10 1006で纏まって出土している。1005 22は見込みに大根葉を描き、高台は豊付の広い蛇目高台である。同じ絵柄・高台の小碗（1006 5）の他、福井駅高架関連地点等でも同デザインの小碗・皿が多くみられた。呉須手大皿は多く出土するがいずれも細片である。401 29は口径34cm程度に復元できる。小杯は口径10cm前後の小碗（1006 4 5）と7cm以下のものに分かれる。小碗では1006 4のような端反が多い。1006 3は白磁で高台内銘を呉須で記す。401 20・21は口縁を輪花に作り、底部に低い足を3つ付ける。見込みには2頭の鹿、外側面には蕨紋を呉須で描く。日本人好みを反映したいわゆる「古染付」向付である。401 19は壺である。口縁から肩部のみの細片ながら山水紋等丁寧に描かれる。1005 36はいわゆる南蛮の焼締長胴壺である。福井城跡では福井駅高架関連地点に続き2例目である。

10) 瓦； 軒を含む丸・平瓦および細片ながら紋様を持つ道具瓦が出土している。軒平瓦は燻しのみで中央に五子葉紋を持ち、施釉瓦にはみられない文様である。軒丸瓦は401 51・52 1033 5が燻して、何れも左巻三巴・珠紋数16である。1033 5は若干巴が離れる傾向にある。1033 2・3は施釉瓦で右巻三巴・珠紋数12 瓦当・上面に施釉する。401 52 1005 48～50は燻し小菊瓦である。花卉中央の葉脈の有無で分けられる。道具瓦は燻して401 57 1033 11が桐紋の一部、1033 13・14は雲紋であろうか。1033 12は文様不明である。桐紋は使用が限定される文様のため出土した意義は大きい。（河村）



石器Ⅱ表込

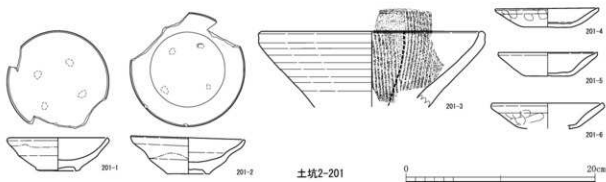
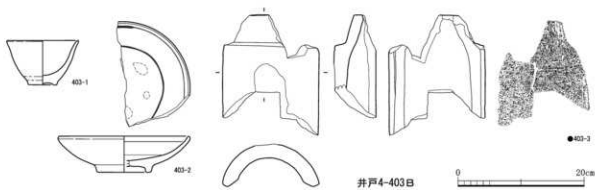


图47 土器・陶磁器① (S=1/4、但し●=1/6)

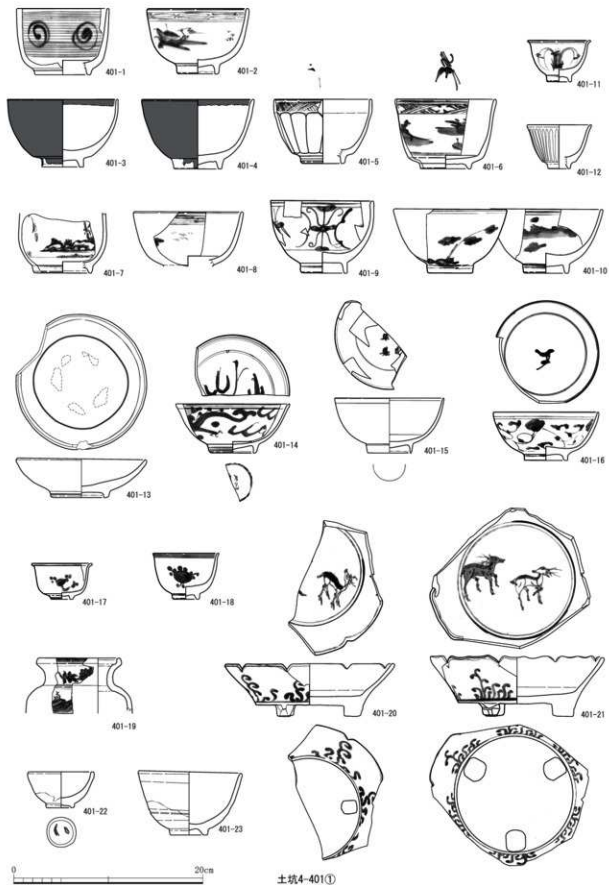


图48 土器·陶磁器② (S=1/4)

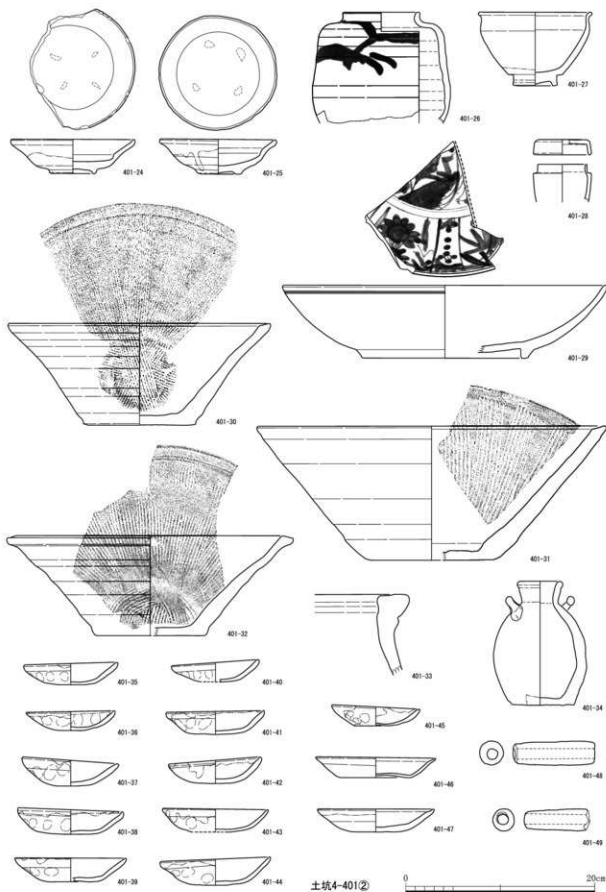


图49 土器·陶磁器③ (S=1/4)

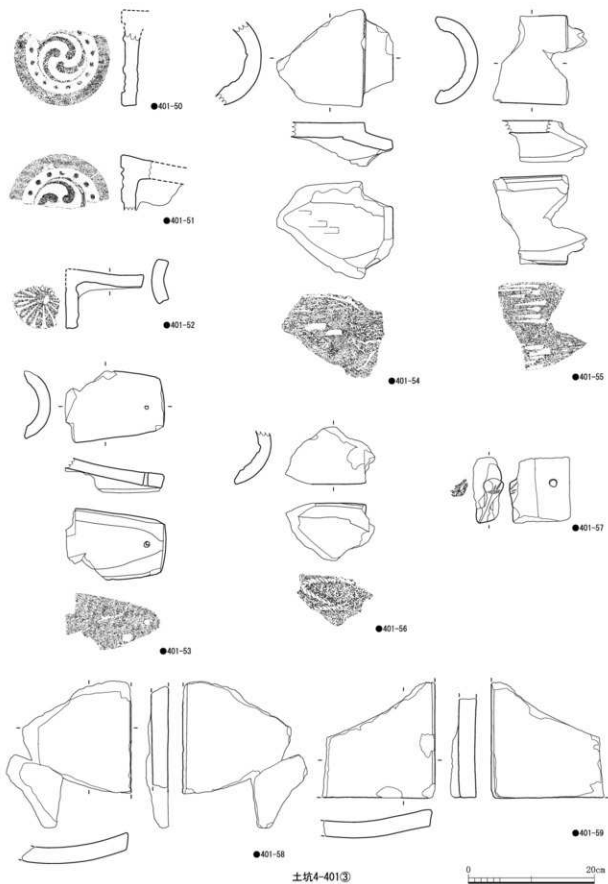


图50 土器·陶磁器④ (S=1/6)